Angel beats! R

まこすけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ａｎｇｅｌ　ｂｅａｔｓ！　Ｒ

【Ｎコード】
Ｎ１５９４Ｌ

【作者名】
まこすけ

【あらすじ】
突然、目が覚めた俺ことキョウスケ。キョウスケがいたのは、『死後の世界』と呼ばれる世界。
この世界では、ゆり率いる『死んでたまるか戦線』のメンバーと天使が戦闘をしていた。キョウスケは、勝手にその戦線のメンバーへ入れられることになってしまう。
そこへトラブルが発生！？
結果、キョウスケは、天使に退去を命じられる岩沢のバンドを手助

けをすることに……。

果たしてキョウスケは、トラブルを解決し、戦線メンバーと共に天使へ対抗することができるのか！？

1話　戦線とバンド（前書き）

初投稿&連載です。

この話は、オリジナル主人公で展開していきます。
オリジナルの過去話から原作アニメの話へ繋がっていくので、好き嫌いな方がいるかもしれません。けど最後まで読んでいただけたら幸いです。
コメントや質問などドシドシください。

これからもよろしくお願いします。

1話　戦線とバンド

「？」

ここは、どこだ？　目が覚めた俺の視界に映るのは、身に覚えのない学校の建物。校庭。

周りが薄暗いのは、夜だからか……？

「校庭……？」

大きな校舎の隣りにある校庭の真ん中。そこに俺は、倒れていたらしい。

けどなんだってこんなところに……？

そもそも、ここは何処なんだよ。

「ようこそ死後の世界へ」

「へ？」

俺は、突然掛けられた声に反応して、後ろへ振り向いた。そこにいたのは、ほっそりとした足に痩せ型の体系と紫の短髪、頭に結んだリボンが目立つ女の子だった。

さっきの疑問に一瞬で答えたのは、この子か？

「誰だ。お前？」

「そういうこと聞くときは、まず自分から名乗るのが普通じゃない？」

腕組みして仁王立ちしてるその女の子は、強気の姿勢で俺の言葉に答えた。
たしかにこういうのは、自分から名乗るのが普通だよな……。そう思って立ち上がりながら俺は、まず自分の名前を話そうとした。
「俺の名は……名前はキョウスケだ。苗字は、わからない。お前は？」
「ゆりよ。他のみんなは、ゆりっぺとか言うけど……別に呼ぶときは、そっちが呼びやすい名前でいいわ」
淡々と答えるゆり。
名前しか言ってないけど、まぁ別にいいかのかな……。それなら――――
「じゃあ、ゆりっぺ「殺すわよ？」
「ひどい！？」
間髪入れずに帰ってきた返答がそれか！？　っていうか人に対する返答じゃねえ！　お構いなしかよ！？
「嘘よ……。本当に呼び方なんて何でもいいわ。君の好きにして。それより、えー……キョウスケ君！　今すぐ私たち『死んでたまるか戦線』の仲間になりなさい！」
唐突に言ってきたゆり。ネーミングセンスがどうこう以前に死んだ……えっと、何の戦線？

「ちなみに命令だから拒否なんてできないわよ！」

「こっちの疑問は無視か！……というより義務かよ！？」

「義務よ！　ココに来たのなら私たちの仲間になる以外、生き残る方法はないわよ。……それとも、天使に消されたい？」

義務って……ん？　なんか今、変な単語出てきたぞ……。天使？　急に何言い出すんだこの子は……。

「……なんだ天使って？」

とりあえず聞いてみる。

天使っていったらアレだろ。背中に羽生やした白装束みたいなの着た女神というか……空想上の人？　けど、そんなの現実にいるわけがないだろ……。

「アレよ」

俺の疑問に答えるかのようにゆりは、自分たちが立ってる校庭の真ん中、それよりむこうの端を指差す。そこは、この学校の外。

その先にいたのは、白髪の背が低い小さな女の子だった。なにかを探すようにあたりを見回している。見た感じは、可愛らしいが……。

「アレが天使？　普通の可愛らしい女の子にしか見えないが……」

ていうか、どう見たらあの子が天使に見えるんだ？

なんだろう……ただ小さな女の子を苛めているようにしか見えないんだが……。

「可愛らしい女の子に見えるのは、外見だけよ。アレに消されていった私たちの仲間もいるんだから……とりあえずここへいたら天使に見つかるわ。私のあとに着いて来て。くわしい話はそれからよ」

着いて来てって言っても……あの子に見つからない場所とかあるのか？

「どこに行くんだよ」

「死んでたまるか戦線の前線基地。そこに私の仲間もいるわ」

そう言って後ろの校舎へ振り返るとゆりは、学校内のほうへと向かう。名残惜しいが俺もあとに続いた。

天使は、今もなお、あたりをキョロキョロと見回している。それも必死に。それはまるで、大事な何かを探している妖精のようだった。

◇　◇　◇

「ここが『死んでたまるか戦線』の前線基地よ」

「……どうみても校長室だよな」

「前線基地よ！！」

どうみても学校内に必ずといっていいほどある校長室だ。窓際に机の両側に前校長の写真とか立て掛けてあるし。それにしても、勝手に使っているようだけど、だいじょうぶなのか？

あと、さっきから気になってるんだが『死んでたまるか戦線』って何なんだよ。
そう思っていると突然、後ろのドアが開いた。思わず俺は身構えようとするが……。

「ゆりっぺ、コイツは？」

「新参者か？」

「浅はかなり…」

入ってきたのは、男二人に女一人。なんだか、すごく濃いメンバーだな……。
一人は、大きな武器背負ってるし。

「紹介するわ。私たち『死んでたまるか戦線』に新しく入るメンバー、キョウスケ君よ！」

すると突然、後ろにいた四人組に紹介し出すゆり。
俺のことを紹介してるってことは、こいつらがさっき言ってた仲間か。
しかし、ここにいるメンバーは、俺も入れて五人。戦線っていうから、もっとたくさんいるものだと思っていたが……。

「……戦線にしては少なくないか？」

「細かいところは、気にしない！　順に紹介するわよ。青髪の子が日向君。隣のなんかやたらでかい斧を持ってるのが野田君。端で『浅はかなり…』って言ってるのが椎名さんよ」

「よろしくな」

青髪の男の子日向が答える。見た感じ細身だけどガッチリした身体つきしてるな。運動か何かしてたんだろうか。

「ゆりっぺに何かしたら殺すからな！」

突然何言い出すんだこいつは……。短気なのか？　名前は、たしか野田だったか。

短髪釣り目のせいか、見た目ワルっぽい。左手に持ってる斧がやたらデカイし……銃刀法違反とか大丈夫なのか？

「浅はかなり…」

この人が椎名さん。黒髪長髪のクールビューティ。目を閉じたままのようだけど……精神統一でもしてるのか？

しかし「浅はかなり…」しか言わないのだろうか？　しかも長いマフラーに手甲って…忍者みたいな格好だな。

「浅はかなり…」

やはりそれしか言わないのか……。

「ここには、いないけど他に岩沢さんやひさ子さんもいるわ」

へぇ、他にも女の子がいるのか。その子たちも合わせて7人……。

「……やっぱり少なくないか？」

「しつこいわよ！　これから多くなっていくんだから！！」

どうだかなぁ……。あ、……そういえば他にも聞きたいことがあったな。
さっきゆりが言ってた『死後の世界』ってやつ。
「ところで最初から気になってたんだが、ここはどこなんだ？　さっき『死後の世界』って言ってたけど」
俺は、今まで溜まってた疑問をゆりにぶつけてみた。
『死んでたまるか戦線』や天使など、まだわからない単語が多いがとりあえず一番気になっていた問題だ。
「言ったとおりよ。死後の世界、つまり死んだあとの世界よ。日本語わからない？」
コイツ……バカにしてるのか！？
イヤイヤ、ちょっと待て……さっきの言動からしてお前のほうが頭おかしいぞ。病院行ってこい。
「死後の世界なんてあるわけないだろ。何言ってんだお前？」
「口で言うより体験したほうが早いかしら？」
「はっ？」
———デカイ音と共に左胸を何かに貫けれた。そして、痛みが走る。
左手で自分の胸の部分に触れる。離した手を見るとそこにあったのは、大量の血痕だった。
そして、向かい側のゆいは、右手に拳銃を構えている。

「……な、んで……」

後ろへ倒れながら頭の中で疑問が沸いていた。そして、自分がゆりに拳銃で撃たれたんだとわかった……。

俺は、そのまま床へ倒れた。痛みで思うように動けなかった……。

「ゆりっぺ、ちょっと殺り過ぎじゃね？」

「彼がぐちぐち文句言うからよ。誰か保健室へ運んであげて」

「自業自得だ。このままゴミ箱へ放り込んでしまえ」

「それこそ、やりすぎだろ」

「浅はかなり…」

周りから聞こえるゆりたちら四人の声。どうして、そんなにマイペースなんだお前ら……！

（…もう少し焦れよ……。）

沈んでいく意識の中で俺はそんな風に思ったのだった……。

◇　◇　◇

「？」

（なんか最初、目が覚めたときとデジャヴみたいだ）

意識がもどった俺の目に最初映ったのは、長い蛍光灯。
どうやらあのあと他の部屋へ移されたらしい……。俺は、白いシーツの上で横になっていた。
上体だけ起こしてあたりを見る。周りには、自分の上着が置いてある机、他に薬が入った棚などがあった。あと消毒液の匂いもする。
ここは、保健室か……。そういえば、目を閉じる寸前でゆりが言ってたな。

「……って心臓を撃たれてハズじゃ！？」

俺は、撃たれた自分の左胸を見る。しかし、そこに傷はなかった。
たしか、ゆりに拳銃で撃たれたハズなのに……なんで！？

「だから言ったでしょ。死後の世界だって」

――――突然、扉のほうから声がした。
声のほうへ目を向けるとそこには、ゆりがいた。いつ入ってきたんだ……？
もしや俺が眠ってた間、ずっとそばにいたのか？

「……どこから沸いてきたんだ？」

「人をミジンコみたいに言わないでよ！！」

「ミジンコなんて言ってねえよ」

どうやったらミジンコなんて返し方になるんだよ。

「……まぁいいわ。簡潔にあなたの疑問に答えてあげる。あなたが死なないのは、ここが死後の世界で、あなた自身すでに死んでいる

からよ。ここじゃ、いくら死んでも時間が経てば元にもどるし、飢えることもない。あと年も取らないしね」

「……つまり不老不死ってことか？」

「一応ね。ただ、天使に消されないかぎりは……。私たちは、天使に消されないため、またその上で操ってる神へ抗うために『死んで溜まるか戦線』として戦っているのよ」

なんか説明的だな……。しかも天使がいれば神がいるってなんか安直過ぎやしないか？

しかし、俺の疑問など関係なくゆりは、説明を続ける。

「私が一発撃ってあげたじゃない。あのとき撃たれても今は平気だったんだから、それがなによりの証拠でしょ？」

たしかにあれだけ大量に出血してたのに今はもう止まってる。撃たれた傷もない。

現実的に考えて、普通心臓を撃たれたら死ぬよな？

非現実な現象。つまり普通じゃない。それは、もうすでにここが現実じゃないってことを物語ってる……。認めたくないが……本当に『死後の世界』なのか。

「死なないことは、わかったが……あの方法は、ないんじゃないか？　いきなり撃つことないだろ」

「貴方がグチグチ文句言うからでしょ。１００回言うより１回殺ること。ここじゃ常識よ？」

ゆりは、そんなことなんでもないように言う。

「怖すぎるわ！！　この世界でしか通用しないだろ、そんな常識」

「ともかく、これで説明終了。今日は作戦も何もないから詳しいことは、また明日伝えるわ。じゃあね、お大事に」

ぶっきらぼうにそう言うとゆりは、この部屋をあとにした。

（誰のせいだと思ってるんだよ……）

不満だらけだったが、仕方ないのだろうか……？　けど、やることが勝手すぎるぞ。

「それより、俺も戦線に参加してることになってるんだな……。まぁ、いいか……とりあえず、この部屋から出よう」

隣の机に置いてある上着を持つと俺も部屋をあとにした。

しかし、しばらくして肝心なことをゆりに聞いていないことに気付く。

「……ここ、どこだ？」

この校舎の中身がわからなかった……。

◇　◇　◇

当てもない俺は、フラフラと学校の校舎内を歩いていた。この学校は、通常どおり授業を行っているようで、教室内の教師に見つからないよう俺は、ヒッソリと隠れながら行動していた。そして、歩き続けて今は放課後。自分の周りにも何人か歩いている学生が増え

てきた。

「しかし……どこが死んだあとの世界なんだ？」

自分が受けた銃弾以外は、わりと普通の世界だった。

周りの生徒たちは、普通に他の人としゃべったり、普通に部活をする子もいて、どれも見たことある学校風景ばかり。普通の学校の日常だと思った。

何の違いもない。

けど、授業に溶け込んでしまったら消えてしまう。それは、つまりこの世界から成仏することを意味しているのだろう。

（……てか、これからどうすればいいんだ？　この前の校長室も行き方忘れたし……）

そんなことを思っていると……ふと俺の耳にギター音が聞こえてきた。軽音楽、バンドか？

とくにやることもなかった俺は、バンドの音がする教室へ向かったのだった。

◇　◇　◇

「ラスト！！」

演奏が終わったようだ。

この教室にたどり着いたのは、少し前だったが。俺は時間を忘れ、このバンドの曲に聴き入っていた。　魂が震えるような音楽。俺は、ここに来て数分で、この曲に恋をしてしまったのだった。

しばらくして気が付くと、曲を演奏していた二人の女の子たちが俺のほうをじっと見ている。
二人ともギターを下ろし、休憩をしているようだ。不審者でも見るような眼で俺のほうを見ていた。

（…どうしよう……とりあえず声でもかけようか…）

「お疲れ様」

教室へ入るなり、ピンク色に髪を染めているリーダーっぽい子のほうに声をかけてみた。

「……アンタ、誰？」

なんか不審がられてるぞ俺……。しかし負けるな！　声出してけ！！

「別に不審者ってわけじゃないんだけど……その……そう！　君たちの曲に惚れたんだ！！」

言ってやったぜ俺！！

「……岩沢、そいつ何？」

もう片方の子がイタイ子を見るような目で俺のほうを見てくる。
心配になったのか岩沢って子に声を掛けてきたようだ。……ん？
……岩沢？

「岩沢……？　もしかて、ゆりが言ってた戦線の仲間か？」

「戦線？　ああ……もしかして新しく入ったメンバーの……キョウスケってアンタのこと？」

ゆりのやつ、一応他のメンバーにも名前教えてたんだな。
でも、せめて外見とか特徴も言っておいてほしいな。名前だけじゃわからんだろう。

「真面目っぽいけど、バカっぽいって聞いてるよ」

あいつ……！！
怒りがこみ上げてくるが、それを抑えてなんとか冷静さを保った。

「あぁ……とりあえず戦線メンバーに入ったキョウスケだ。岩沢だっけ、とそっちの子は……」

「ひさ子だ」

岩沢の隣りにいた女の子がぶっきら棒に答えた。まだ不審がられてるのか俺……。

「岩沢とひさ子だな、よろしく。二人は、バンドをやってるのか？」

「私たちは、バンド演奏で学園の生徒を引きつけるのが任務だからな。今まで練習してたんだ。私がボーカル、ひさ子がギター。二人だけどね」

生徒の引きつけ役？　何に使うんだ……。あと軽音部とかじゃないのか？

「二人しかいないのか？」

「メンバーが足りないんだ……。ファンは、いるんだけど。なかなかステージじゃ演奏できなくて……。あと生徒会に認められてるわけじゃないから、教師たちがうるさくてさ…。一部の生徒たちからも反対されてるし……」

ひさ子が俯きながら理由をこぼす。

この学園にも生徒会があるのか……。それとバンドを認めない教師たち。なんかどこかの高校みたいだな……。

しかし、一部の生徒から反対されてるってことは、ここで演奏してること自体まずいんじゃ……、

「また、貴方たちね」

突然、後ろから声がした。振り向くとそこにいたのは、見たことがある白髪で華奢な女の子。ゆりが言ってた天使っていう女の子だ。

「一部の生徒からの苦情もあります。放課後とはいえ、生徒や周りの教室のことを省みない行為は、即刻やめてほしい。教師からも再三言われているハズだけど……？」

天使は、淡々と物を言う。教師からの意見も述べてるあたり、もしかしてこの子が生徒会長？

前は、可愛いなんて思ってたが、見ていて表情がまったく崩れてない。まるで機械みたいだ。

俺や岩沢、ひさ子の前に立つと天使は、なおも二人に対して注意を促す。

「そもそもこちらが認めてもいないクラブおよび部活を勝手に結成すること自体がルールに違反している……。即刻、機材をまとめて

退去してください」

……なんかイライラしてきた。いきなり現れるなり、言いたいことだけ言いやがって……。

天使の発言に対して岩沢が反論する。

「たしかにやってる行為自体は、許されないことだけど、私たちを支持してる人たちだっている。メンバーだってこれからも増やしていく……だから！」

「その話は、何度も聞いた……。けどルールに違反しているのは、事実。だから早く退去をお願いします。場合によっては……」

一方的に淡々と物言う天使に対して、俺は少し感情的になった。怒りが湧き上がってくる。

「ちょっと待てよ」

俺は、たまらず言った。

「さっきから言いすぎじゃないか？　ルール，ルールと国家権力じゃあるまいし……。たしかに岩沢たちは、ルールを守ってなかったかもしれない……けど、一生懸命やってる奴らの努力を取り上げる権利は、誰にもないだろ」

「……でもルールを破っているのは、事実。それに生徒からの苦情もあります。それにメンバーも二人しかいないのでは、部活として成立しない。最低でも五人は、いる」

こいつ……またルール、ルールって……！！。

「だったら次、お前が来るまでに残りの三人を集める。それなら文句ないだろ！」

キレてしまった。俺は、天使に対してキレてしまった。

「……わかりました。だけど期日は、明後日。それまでにメンバーが見つからなかった場合、即刻バンドは、解散。学校内でのライブまたは演奏を禁止します」

「！！……何も禁止しなくても！」

「こちらも長い期間、貴方たちの行為に目を瞑ってきたので、これぐらい当然です。再三の要求も全部無視してきたあなた方に責任があります」

天使の返答に顔を濁す岩沢とひさ子。しかし俺は———

「わかったよ……。明後日までに残りの三人集めてやるから！　あとで吠え面かくなよ！！」

無謀にも感情的に言ってしまった……。

その発言に岩沢とひさ子は、ただ呆然とするだけだった……。

1話　戦線とバンド（後書き）

全キャラクターを絡ませるのは、正直にいって難しい…ので、戦線ができて、まだ間もない頃という流れで話を書きました。
これから音無までのキャラクターたちも出てきます。もちろん音無以降のキャラクターたちもです。

話自体は、ガルデモのメンバー、特に岩沢とひさ子寄りで進めていきますが……最終的に原作へ合わせていくので、正直言ってどうなるかわかりません…。

こんな話で申し訳ないですが、なるべく早く過去話を終わらせて原作の話のほうへいくようにがんばります。これからもよろしくお願いします。

あと、コメントなどもらえるとそれが励みになります。

次回は、メンバー集めの話です。

2話　新メンバーそして告白？（前書き）

お待たせしました。今回は、メンバー集めの話。例によってガルデモメンバー中心になるので他のキャラクターは、ほとんど出ません。ただ、ゆりを除いては…。本当に申し訳ないです。今のところ過去話は、まだ少し続きます…が、ちゃんと原作のアニメのほうへ話が続くように投稿していきます。　では、どうぞ

2話　新メンバーそして告白？

夜六時三十分。ここは、『死んでたまるか戦線』前線基地。この部屋で二人の人物が向かい合って話していた。

そこには、仁王立ちの女の子が一人。もう一人は、男の子。なぜか男のほうは、恐怖に怯えたような顔をして小さくうずくまっていた…。

彼の名前は、キョウスケ。本日付けで『死んでたまるか戦線』に入った新しいメンバーだ。そして、彼に説教をしている人物は、ゆり。『死んでたまるか戦線』のリーダーだ。

◇　◇　◇　◇

「……どーしてくれるわけ？」

俺の前にいるのは、鬼の形相をした悪魔…じゃなくて！……腕組みしたゆりがいた。

彼女は、もちろん怒っているわけで…その理由は、俺にあった……。

「天使相手に言い分に納得したうえにバンドメンバー集めなきゃ強制退去？…しかも明後日までに集めろなんて……貴方、バカじゃないの！？」

「…怒りで…その、前が見えなかったんだよ……でも仕方ないだろ！！あーでも言わなきゃ即刻退去されてたかもしれないんだぞ！それに目の前の岩沢やひさ子たちをほっとけねえだろ！？」

俺も怒りに任して少し言い過ぎたかもしれない…が、あのままだと岩沢たちのバンドが無くなってたかもしれない……ああ言うほかに何か解決策があるとは、思えなかった…。

しかし、ゆりは俺の考えを見透かしたように重ねて言ってきた。

「私は、わざわざ天使の言うことに納得しなくてもよかったって言

ってるのよ！！向こうが用意したルールにわざわざ従うなんてありえないわ！！」
……それは、お前のプライドの問題じゃないか？
「……天使の言うことに従えば、ここの生徒たちみたいになるわよ」
「……どういうことだ？」
「ここの生徒たちは、私たちと同じじゃない。言うなればＮＰＣ（ノンプレイヤーキャラ）。性格や個性は、あるけど私たちにみたいに生前の記憶がないの」
つまり、こちらの世界が用意した駒みたいなものなのか…。
生前の日常とあんまり変わらなく見えたのは、設定通りここの生徒や教師が動いているから。
「天使の言いなりになって、ここの生活を受け入れれば、俺もそうなるのか？」
「…まぁね、それに消える場合もあるし……。そうならなかっただけでもよかったわ…」
悲しそうにゆりは、そう語った。
俺は今日ここへ来たばかりだが…そんな俺でも、もし消えたりしたら…ゆりはどう思うんだろう…。悲しんだりするのか。仲間のための泣いたりするのだろうが……？
ゆりにつられて俺まで悲しい顔になっていたのだろうか。ゆりは、俺のほうを再度向くと気持ちを切り替えるように急に叫んだ。
「とにかく！今後一切、私の知らないところで天使の言い分なんか聞かないこと！いいわね！！」
俺から見たゆりの目は、本気だった。
「！…わかったよ」
一応、これで説教は、終わりなのか・・・。
終わったと思ったら、なんか一気に疲れてきた…。先程まであった恐怖や胸のモヤモヤは、きれいさっぱり無くなったし…。
でもまあ、ゆりのこういうところに他の奴らは、惹かれたんだろう…きっと。一応、戦線のメンバーをまとめてるわけだし……。神に抗うなんてこと、普通の人間が言えるわけがないし。

「…まぁ、天使との戦闘にならなかっただけでもよかったわ。それもキョウスケのおかげで回避されたんだし、期限付きとはいえ向こうも待ってくれるようだから結果オーライよ。ありがとね…」
「えっ？…お、おう」
…さっきまでの怒りは、どこいったんだ？ありがとうって……なんか照れるぞ…！
そう思っていると…ゆりは、いつもの陽気な顔にもどり俺に言ってきた。
「それじゃあ、メンバー集めがんばってきなさい！」
「……へっ？」
「へっ？…じゃないでしょ。あなたが天使にそう言ったんだから、責任持って集めるのが当たり前じゃない？」
……そういえばそうだった。
天使の提案に乗ったのは、俺であって岩沢やひさ子たちは、それを聞いてただけ。つまり責任は、すべて俺が引き受けたワケで……解決するのも俺。
「わかった…。やるよ、メンバー集め」
「素直でよろしい！……だってさ岩沢さん」
！！――――何故そこで岩沢の名前が出る！？
「わかった」
聞き覚えのある声がしたと思ったら、後ろの扉から岩沢が入ってきた。もしかして今までの話、全部外で聞いてのか！？
「……一応聞くがどこから聞いてたんだ？」
「怒りで前が～のところから、全部」
死にてえ…。ほぼ全部じゃねえか……。
「話も終わったし、ご飯にしましょう。食堂へ行くわよ。あとの話はそれからにしたら？」
俺への説教が終わったようでゆりは、立ち上がると体を起こして、楽しそうに部屋を出て行った。岩沢もそのあとに続く。俺は食堂の場所がわからないため、急いで二人のあとを追ったのだった。

◇　◇　◇　◇

食堂に着いた俺や岩沢、ゆりを待ってたのは、他の戦線メンバーたちだった。
テーブルに集まって俺たちの分の席もちゃんと取っている。
「岩沢、遅かったな」
最初に会ったメンバーとは、別のテーブルにひさ子が座っていた。こっちは、バンドメンバー中心かな？
ひさ子のテーブルの上には、オムライスとラーメンが置いてある。一人食べきれそうには、見えないし岩沢の分か？……二人分？
「俺のぶんは？」
「買ってくれれば？食券持ってるでしょ？」
俺の質問にひさ子は、普通に返してきた。何その持ってて当たり前でしょ？みたいな返事の仕方は……？しかも…。
「食券？」
「食堂なんだから食券ないと食べられないよ。当たり前じゃない」
それは、まぁそうだが。食券……そんなもの持ってないぞ俺は。
「持ってないぞ」
「ゆりから貰ってない？食券余ってるって聞いたけど」
――ひさ子の返答に不意を突かれた俺！どういうこと！？
今までゆりと会話してて食券なんて単語自体、まったく出てきてないんだが……。
真相を確かめるため、ゆりへ聞いてみる。
「……ゆり、食券は？」
「……私の前にある肉うどんがソレよ」
こいつ……人の食券使ったのか！？
「俺の食券使ったのか！？」
「使ってないわよ！！アンタのも含めて、持ってた食券全部期限過ぎてたのよ！！…だって仕方ないじゃない！この肉うどんだって今

日やっと親切な子から譲り頂いたものなのよ！！」
　ちょっと待て今の文章、単語がおかしかったぞ！？てか、そんな親切な子がお前にわざわざ食券渡すかあ！！
「お前……もしかして無理やり奪っのか！？」
「盗んだなんで人聞き悪いわよ！もらったのよ！！それに任務じゃ、そんなこと日常茶飯事よ！！」
　こいつ……！自分から盗んだって言ってるぞ！それに日常茶飯事！？いつもそんなことしてるのか！！
「俺のご飯は！？」
「ほしかったら自分で盗ってきなさい！！」
　こいつ無茶苦茶だ！！そっちが日常茶飯事でもこっちは、来たばっかりなんだぞ！！どうしてくれんだよ！！だいたい人の食券盗めるか！！
「！…今回だけだからな…」
　……なんかもうこれ以上怒ったら、ますます腹が減ってくる。仕方ない……あきらめるか…。
　これ以上、空腹感が増してもどうしようもないのし、ゆりに怒鳴っても食券は、もうないしな…俺は我慢することにした。
　しかし『死後の世界』でも腹は、減るんだな…。一応、勉強になった。そんな風に考えて俺は、テーブルの空いている席、岩沢の隣へ座った。
「ゆりの相手、お疲れ」
「説教といい、もうクタクタだよ……」
　なんだかんだで、まだ会って間もない人間とこれだけ話すこと自体、珍しいと思うんだが…。ゆりや岩沢たちが特殊なのか…？それとも、俺がおかしいだけ…？
　そんな考えをしている俺に岩沢は、救いの手を差し伸べてくれた。
「私の分、よかったら食べていいよ。」
　岩沢は、俺に自分の分のオムライスを分けてくれた。…マジですか！ありがとう！アンタ神様だよ、ホント！！嬉しさのあまり、よ

だれが零れそうになる。
「いいのか！？」
「キミには、助けてもらったしね。別にいいよ、私のことは気にしないで」
「ありがとう。…じゃ、お言葉に甘えて」
岩沢にお礼を言うと。俺はオムライスを食べ出した。
…なんか久しぶりに食べた気分だ。しばらく幸せに浸っていると俺の前に座っていたひさ子も便乗してラーメンの上に乗ってるチャーシューやメンマを分けてくれた。
ひさ子…嬉しいけど。これじゃ、俺が捨て犬みたいだ……。
「浅はかなり…」
椎名さん、その追い打ちは、ヒドイ……。その日、俺の心へひびが入った。

◇　◇　◇　◇

次の日の朝。
生徒会に見つからないよう、教室へ集まった俺と岩沢とひさ子。
今回ここへ集まった理由は、他でもないバンドメンバーを揃えるため。他の生徒へ勧誘し、メンバーを5人にするためだ。昨日、食堂で話した結果、地道な作業だが、これが一番ということになった。ポスター貼ったのでは、明日までに間に合わない。
「一応聞いておくが岩沢、この学園で楽器が弾けたり、音楽に興味があるやつとかは、知らないのか？」
「…特には、知らない。もしいたら最初から誘ってるハズだし」
…だよな。もしいたら生徒会がわざわざ退去を言いにくるハズがないもんな…。俺が来るまでに岩沢たちもバンドのために何かしらしていたようだが、ファンは、増えてもメンバーは集まらなかったらしい……。
（これは、難しくなってきたかも……）

「期日は、明日……今日中に見つけるしかないな」
俺は、決心すると岩沢、ひさ子と共に教室を後にした。

◇　◇　◇　◇

そして、勧誘すること5時間。外は、すっかり夕暮れになっており、学校内の生徒も少なくなっていた……。
「君、バンドに興味ない？もしよかったら、俺たちと一緒に…」
「すいません…他の部活との掛け持ちは、禁止されてるので…。あの…その、ごめんなさい」
そう言うと女の子は、苦笑いを浮かべ、そそくさとその場から去っていった。
「……これで４５人目か」
律儀に数えていたのか、現実の厳しさを皆に伝えるひさ子。……心に響くね！本当に。
「やっぱり生徒会や学校側がうるさいのかな・・・それにみんな遠慮がちだな…。申し訳ないって感じの子が多かったし…」
勧誘してきた子たちは、みんな岩沢たちを見ると目を合わせないようにして、どこか遠慮してる雰囲気だった。まぁ、わかんなくもないかな……。
俺も岩沢たちの曲を聴いて本当に凄いと思ったし、二人とも実力は、かなりのものなんだろう。
声を掛けた子たちは、その技量を比較してバンドに入ろうとしないのかも……。
まぁ、たとえ無理に誘っても向こう側は、迷惑なだけだからな…それに岩沢たちもイヤだろうし……さてどーしたものか…。そう悩んでいると…。
「メンバー見つかった！？」
！――――声を掛けてきたのは、ゆりだった。
「…びっくりさせんなよ」

「何よ！気になったから見に来てあげたのよ！それでどうだったの？」
「……まだ一人も見つかってない」
「そう……」
そんな暗い顔されても困るんだが…。
ん？待てよ……ゆりは、ここの生徒に詳しくないのか？
「ゆり、この学校でバンドとかやってるやつ知らないのか？」
「知ってるわよ」
「誰なんだ！？教えてくれ！！」
「……昨日、食券をくれた子よ」
なぜそれをもっと早く言わない！？
「たしか入江って子だったかしら…？その子、三日前にここへ来たばかりで戦線メンバーに入れようと思ってたのよ。断られたけどね…って…ちょっと、聞いてるのキョウスケ？」
「ゆり！その子は、どこにいるんだ！？」
俺は、ゆりに切迫して場所を問いただす。
ゆりからその入江って子がいる場所を聞くと、岩沢やひさ子を置いて、俺は疾風のごとくその場所へ向かった――――。

◇　◇　◇　◇

！――――見つけた！！廊下で一人突っ立ってる紫のロングヘアーの女の子！
俺は、近付きその子の目の前へ立った。彼女も驚いて俺のほうへ顔を向ける。
「ハァ…！…入江ちゃん…か！？」
「えっ…！？あ、はい……なんでしょう？」
急に走ったせいか、吐息が荒い。足も若干フラつく。けど、そんなの関係ない！俺は、彼女にどうしても聞かなければいけないことがあるんだ…！

「ハァハァ…これから俺が言うことをよく聞いてくれ、ハァ…一度しか、言わない…！」
「…はへっ！？あ…あの…」
「ハァハァ…入江ちゃん……俺の…！！」
「キモい！！」
――突然、俺の顔にひさ子の回し蹴りが炸裂した！！
「ハァハァ、ハァハァって…お前は、どこの変態だ！？幼女趣味か！？女の子に近付いてるキモい奴しにしか見えないぞ！！」
ひさ子が襲われそうになった子を介抱するように入江ちゃんを両腕で匿う。たしかに傍から見れば俺の行動は、変態そのものだったかもしれない…。
（だからって蹴ることないだろうが！！）
ひさ子は、警戒の目を俺に向けたままだ。このままだとここへ来た意味がない…。俺は、少し落ち着き冷静になった。
「……わかった。いきなり聞いたりして悪かったな入江…」
さっきより若干マシになったのか入江は、俺の返事に答えてくれた。まだ少し小動物みたいに怯えてるが……。
「い…いえ、それで私に何か…？」
入江に改めて説明するため、俺は深呼吸を行う。
（気持ちを切り替えろ俺。いけるいける、冷静になれ。彼女を困らすな）
心の中で、決心した俺は、やっと本題を彼女に聞く。
「……入江、もしよかったらでいい…俺たちとバン…」
「コラァ！！入江に何してんのよ！」
！！――――俺の横顔に女の子のドラップキックが炸裂した。

◇　◇　◇　◇

「……というわけで、もしよかったら俺たちとバンドをやってほしいんだ」

時間も場所も変わってここは、岩沢たちがいつもバンドの練習で使う教室だ。
教室の真ん中に椅子を並べて俺は、入江とその友人関根の二人と向かい合いながら話をした。俺の後ろには、もちろん岩沢とひさ子もいる。
因みに俺の顔には、ドロップキックの足跡がちゃんと埋まっていた。入江の隣りに座る金髪ロングヘアーの女の子、関根がやったことだ。見た目かわいらしいのにあのドロップキックは、明らかに俺を殺す気だった。なんて女の子なんだ…。
関根に聞いてわかったが俺の行動は、周りから見た場合どうやら変態のように見えるらしい。……なんでそう言う風に見えるんだろ。ひさ子といい関根といい…。ひさ子の回し蹴りも見事だったが。
しかし入江と関根は、さっきの時と違い真面目に話しを聞いてくれた。関根は、俺にドロップキックをしたことは、まったく根に持っていないようだったが……気にしないようにした。
俺は、それよりも二人にバンドのメンバーへ入ってもらいたい。そのことだけを考えていた。
「バンド…ですか」
「ふ〜ん」
「そういえば二人は、こっちの世界に来たばかりなのか？入江は、ゆりから聞いたが…関根は？」
「私も三日前。まだよくわからなくて学校の中フラフラしてたら、同じように迷ってた入江とバッタリ会っちゃって、それで一緒にいるの」
こっちに来た日は、俺より少し早いぐらいか…でも、そんなに変わらないのかな。
じゃあ、ゆりが入江を見つけたのは、偶然なのか……。関根もまだ戦線とか天使のこととか、よく知らないようだし……。
考えて終止耽っていた俺に関根が尋ねてきた。
「ねぇ」

「なんだ？関根」
「私バンド入ってもいいよ」
「そうか……って…えっ！？本当か！？」
「わ…私も、バンド入りたいです」
関根続いて入江も賛同して言う。
なんと二人共バンドへ入ってくれるらしい。こんな嬉しいことってないぞ！！
俺と同じように後ろにいる岩沢やひさ子の顔にも笑顔が浮かぶ。
しかし関根は、ニンマリとイタズラっぽい笑みを浮かべ、もう一言追加してきた。
「ただし、条件がいるの」
「……条件？」
「そう。さっき入江と話しててんだけど、私たちあなたたちの曲聴いたことないんだ」
「それで？……もしかして、曲を聴きたいのか？」
「うん」
頷く関根。俺は、入江のほうにも目線を会わせ、一応聞いてみる。
「それだけでいいのか？」
「はい、私たちまだ、こっちに来てから日も浅いので…みなさんの曲、聴いたことないんです…」
そういえば、二人がここへ来たのは、三日前。どこをさ迷っていたのかは、知らないが…さすがに岩沢たちの曲、知るわけがないか……。
「それならお安い御用だよ。ひさ子っ」
「りょーかいっ」
岩沢とひさ子は、準備を手早く済ますと演奏を始めた。

◇　◇　◇　◇

「ラスト！！」

演奏が終わった。それからの俺と入江、関根は、曲に聴き入ってた――――。そして、再び俺は思う。
（やっぱりすごいな…！）
「岩沢お疲れ、ひさ子も」
「ありがと」
「うんっ」
「どうだった…ふたりとも？」
俺は、入江と関根に感想を求めた…が……。
「……」
二人は、固まったままで動いてなかった。顔もボーっとしている。
…大丈夫か？
入江に声を掛けてみた。
「おーい」
顔の前で手を振って見る。気絶してるわけじゃないよな？
「おい」
頭にちょっと強めのチョップを入れてみる。すると――――
「何すんのよ！」
！――関根は、反射的に俺へ蹴りをかましてきた！暴力反対！
「お前が何すんだよ！」
「レディーの頭にチョップだなんて痛いじゃない！殴るわよ！！」
いや、それよりもすでに蹴られてるんだが…！てか、反射的に蹴りをいれるのは、やめろ！…なんか…ちょっと、チラッと見えるんだよ！！女の子なんだから、その辺自覚しろ！ひさ子もな！！
俺は、煩悩を振り払い、関根に重ねて尋ねた。
「お前がボーっとしてたからだろうが！！…どーしたんだよ？」
尋ねた俺の問いに反応した関根は、顔を少し赤くすると勿体振りながらもこちらを向き、語った。
「……感動…した」
「私も…この曲、すごく好きになりました…」
関根に続き、入江までも感激しそうな言葉を語ってくれた。思い

掛けない二人からの言葉。
そりゃそうだろうな、俺もこの曲に惚れたんだから…。
岩沢とひさ子が作ったこの曲に……。
「じゃあ…入ってくれるのか？」
「もちろんよ！私たちでいいならね！この曲、まだ未完成なんでしょ？」
関根の問いに岩沢が答える。
「…ああ、まだ人が足りないし。曲自体は、全部完成ってわけじゃないな」
「だったら私たちもバンドに入ります。それで曲、絶対完成させましょう」
入江も関根に賛同して言ってくれた。これでメンバーが揃った。
俺は、ひさ子のほうを見た。彼女も顔がニヤついてる、きっと嬉しいんだ。…俺も嬉しいぞ！
しかし、皆の反応とは、裏腹に岩沢が冷静に言った。
「けど…あと一人足りない」
……えっ？……ちょっと待てよ……。
…俺がいるだろ。
「何言ってんだ。……俺もメンバーに入れろよ」
「えっ！？キョウスケ、入ってくれるのか！？」
急に嬉しそうになる岩沢。なんかその返答は、少しショックだったが…まあ、いい。
「当たり前だろ！……それとも、迷惑だったか？」
「……別に迷惑じゃないけど、キョウスケは・・・・」
冷静な岩沢にしては、しどろもどろしている。申し訳ないみいたな反応しやがって……。
「…最初に言っただろ。お前らの歌に惚れたって……！」
俺は、素直な気持ちを岩沢やひさ子に語った。責任感や慈悲とかそんなんじゃなくて、今思ったことをすべて彼女たちに語った。
そんな俺の答えに岩沢は…顔に笑顔を浮かべて返した。

「ありがとう、キョウスケ…！」
「おう…！」
なんか改めて言うと照れるな……！
…なんかでもコレッテ……んっ？なんか変だぞ…？
すると突然――。
「惚れただなんて、よく言えますね～！！傍から見たら告白してるようにしか見えませんよ～」
「なっ！？」
「えっ…！」
「なっ…！」
入江たちがいること忘れてた…！
それになんだよ告白って！！別にそういう意味で言ったわけじゃない！！岩沢やひさ子だって迷惑だろ、そんなの！？
しかし俺や岩沢、ひさ子は、顔を真っ赤にしてお互いに目を合わせられない状態になっていた。そんな俺たちのことなど、お構いなしに関根は、続けてもう一言加える。
「相手は、誰なんですか～？岩沢さん？それともひさ子さん？」
こいつ…完全に遊んでやがる！！
イタズラっぽい目で関根は、俺たちをからかう。
「お前、余計なこと言うなって！岩沢やひさ子だって迷惑だろーが！！」
「でも、女の子対してそれは、失礼ですよ！！」
入江まで絡んできた。
何なんだ！！この学校やたらミーハーな子多いぞ！？どーなってんだよ！！
そんな混乱している教室の中でひさ子だけが真っ赤になっていた。
彼女は、怒りのメーターを一気に臨界点突破し…そして――
「もういい加減にしろー！！！！！」
俺は、オーバーヒートしたひさ子から思いっ切りアッパーを食らった――！！

「ぐばあっ！？」
……アッパーを食らい宙を浮いた俺は、窓に映る夜空を見上げ、ふと思った。
（今日も星がきれいだな…）
そんなくだらないことを思いながら俺の体は…そのまま教室の天井へ突っ込んだのだった……。

2話　新メンバーそして告白？（後書き）

原作を軽く無視していってますが…次話あたりガルデモ結成といく予定です。キョウスケは、男子なのですが…そこは、いろいろと考えてるので…ガルデモメンバーも原作に合わせます。　読んでくださった方々ありがとうございます！これからもがんばっていくんでよろしくお願いします！！　感想、読みにくかったり、誤字、脱字など、なんでもいいので思ったことがあれば、コメントください！！皆さんの感想やコメントが私の小説への糧になりますから！！

では、また

3話　過去の記憶（前書き）

すいません。いろいろと忙しくてすぐに投稿ができませんでした。
いろいろと質問ありがとうございます！とても参考になりました。
話の内容が次へ続く形になりますが、やっと3話です。
ユイが初登場します！
主人公の謎など少し伏線入れてますが読んでもらえると嬉しいです。

3話　過去の記憶

「傑作ね！！」

「……」

ここは『死んでたまるか戦線』の前線基地もとい学校の校長室だ。
俺の目の前で女の子が腹を抱えて笑っている。
爆笑している女の子の名前は『死んでたまるか戦線』のリーダーゆり。因みに俺の名前は、キョウスケ。ついでだから覚えないでいい。

「それにしてもあなたもバカよねー」

「はっ？　何が……」

「こっちの話よ。それよりメンバー集まったんだって？　新しい子を二人も加えるなんてアンタやるじゃない！　見直したわ」

いつも通り腕組みをしてゆりは、言った。
ゆりが言ってることは、少し前に岩沢たちのバンドへ勧誘した新メンバー関根と入江のことだろう。
彼女たち二人と俺が入ることでバンドは、生徒会のノルマであるメンバー5人となった。
そのおかげで学校側から無事バンドとして認められたのだ。

「まぁ、これで大体的に任務を遂行することができるわ。」

大体的な任務？　なんか大掛かりなことでもするのだろうか……。

「ギルドへ降下するわ」

「ギルドって何だ？……お金？」

「ギルドは、私たちが天使相手に使う武器を製造する地下工場よ。あなたの心臓を撃ち抜いた拳銃もそこで製造したものよ」

……いやなこと思い出させないでくれ。

俺は、撃たれたときのことを思い出し、あのときの胸の痛みを想像した。出血量もハンパなかったし……。

「……そのギルドってトコへ行ってどうするんだよ」

「武器や弾丸の補充とメンバーの集結よ。あなた会ったことないかもしれないけど、他のメンバーとも合流するわよ」

他にもメンバーがいるのか…どんなやつらだろ？全員、合流するのが目的なら当然……、

「岩沢たちも行くのか？」

「そうね、岩沢さんたちにも一応伝えておいてくれる？」

「……わかった。じゃあ俺は教室にもどるぞ」

「あっ、ちょっと待って」

そう言って、帰ろうとした俺をゆりが引き止めた。

まだ何か言いたいことがあるのか。

しかし、ゆりの口から出た言葉は、俺たちバンドメンバーにとって致命的なものとなった。

「三日後、体育館でバンドメンバー結成記念のライブを行うって他の生徒へ発表したから！！　用意しときなさいよ！」

「……えぇぇぇ

それとは対照的に入江は、かなり焦っていた。

「ど……ど…ど、どーしましょー！！　私まだそんな大勢の人の前に立ったことなんて一度もないのに！！　どーしましょーキョウスケさん！？」

「…落ち着け入江」

そう言って俺は、入江の震える手を強く握った。こうすれば緊張感なんて吹っ飛ぶさ……！！

「入江に何してんのよ！！」

「ぼはぁっ！？」

なんてやってたらひさ子の回し蹴りが炸裂した！　もちろん俺に！！

「イッテぇ……毎回頭を蹴るなよ！　けっこう痛いんだぞ！！」

「アンタが何かと理由付けて、女子に触ろうとするからでしょ！」

俺がこうやって何かと入江に触れようとするとひさ子は、いつも蹴りをかます。

入江だけじゃなく他の女子のほう向いたりするといつもこうだ。

……そういえば俺がバンドメンバーに入ってから頻繁に蹴られるようになったな気がする。なんでだろ？　ワケが分からん。

「……ともかく明後日にライブがあるから、それまでに練習しとけってことだろ？　だったら新しい曲、考えたほうがいいかもしれな

い」

俺の後ろにいた岩沢が冷静に語った。

岩沢の言うとおりだ。俺たちのライブを成功させるためには、もっと練習してたくさんの生徒が俺たちを見てくれるように注目させないといけない。

これから起こる任務のためにも俺達の演奏は、必要不可欠なのだ。

それならやるべきことは、一つ。こんなところで言い合っててもしかたないな……。

「岩沢の言うとおりだ。俺達の曲を生徒に届けるためにもみんなでがんばろうぜ！」

「……そうだな」

「うんっ！」

「そうですね！」

俺の掛け声と岩沢の指示でみんな一致団結したようだった。それぞれ気持ちもまとまったみたいだし……。

それにしても、さすが岩沢。やはり頼れるリーダーだな。

「ありがとな岩沢」

「別に。……それに、キョウスケのおかげだ。礼を言うよ、ありがとう」

「大した事してねえよ……むしろ岩沢のおかげだ」

「そっか。……そういえばキョウスケは、ギターどれぐらい弾けるの？　まだ演奏聴いたことないからさ」
バンドメンバーに入ったはいいが、肝心の実力をまだみんなに見せてなかったな。……しかし、あのときも勢いで俺は、メンバーに入ると言ってしまった……。

「弾いてみてよ。私、キョウスケの演奏聴いてみたいな」
岩沢に言われ俺は、ギターを持った。周りのメンバーも俺に期待しているようだった。

「わかった」

今にして思えば、どうしてこんなことを言ったのか自分でも分からなかった……。
そういえばギターが弾けたような、そんな曖昧な考えが俺の中に浮かんだからだ。

俺には、生前の記憶がなかった。

◇　◇　◇

私は、キョウスケの実力が見てみたかった。
成り行きだったかもしれないけど、キョウスケも私たちのメンバーだ。
だから私は、彼の実力を知っておきたかった。
生前、何をしていたのか気になったが今は、それを聞くときじゃない。
そう思いながら私は、キョウスケへ自分のギターを貸した。

「じゃあ、弾いてみてよ。キョウスケの演奏、聴いてみたいし」

「わかった」

私の提案に素直に答えるキョウスケ。

だけど私は、このとき知る由もなかった……。キョウスケの底知れぬ実力を……。

そして、思った。彼は生前、本当に何をしていたんだろうか……？

◇　◇　◇

「……終わったぞ」

演奏が終わった。勢いで演奏した感じだったが俺の体は、初めからやり方を知っているようにスムーズに動いた。

あとは、終わるまで全力で演奏するだけだった。

演奏終了後、俺は、並んで立っている岩沢たち四人のほうを向くが……。

「……おい」

俺の反応に四人は、まったくの無反応だった。そこまで俺の弾いた曲は、酷いものだったのだろうか……？　それとも俺の実力が大したことなかったから呆然としてるだけか？

いろいろとこちらで思考錯誤していると、岩沢がやっと反応してくれた。

そして、俺に言う。

「キョウスケ……この曲は？」

「いきなりだったから頭に浮かんだものを弾いてみたんだが……やっぱ変か？」

かなり失礼な言い訳だった。

しかし、岩沢の返答は、俺が思い浮かべたものとは、まったく逆だった。

「……凄かった」

「えっ……？」

「聞いたことない曲ですね……。もしかして、オリジナルですか？」

俺の腑抜けた言葉を覆うように関根が発言した。

しかし、曲名がわからない俺は、少し戸惑いながらなんとか、それに答えた。

「たぶん、そうだと思う……」

「それにキョウスケさんのギターの扱い……明らかに上級者のレベルですよ……。生前、何してたんですか！？」

「……多分、軽音楽部かバンドをやってたんじゃないかな？」

驚愕する関根の問いに咄嗟に受身で返してしまった。

「キョウスケ……この曲、明後日のライブに使えないか？　私たちも全力でがんばるから……この曲を他の人にも聴いてもらいたいし」

懇願するように言う岩沢。

「別にいいケド……っていいのか？　俺の実力だって……」

「何言ってるんですか！？　キョウスケさんの実力半端ないです、ここの誰よりもトップですよ！！　岩沢さんやひさ子さんも上手かったけど……キョウスケさんは、上手過ぎです！！」

入江……興奮してるのか？　なんか本音みたいなのがこぼれまくってるが……。

しかし、岩沢もひさ子もこの説明には、納得なようだった。

オイオイ……リーダーのお前らが納得すんなよ……。

「じゃあ、この曲のボーカルは、キョウスケさんに決定ですね！」

入江は、そう言って岩沢やひさ子のほうを見る。すると、それに答えるように彼女たちは、頷いていた。いや、そんな満足気に頷かれても困るんだが……。

「じゃあ、ライブに向けて練習がんばりましょー！！」

関根は、ノリノリのテンションで気合の入った声を上げた。

「「お前が仕切るな！！」」

そう言って、息の合った俺とひさ子のチョップが関根にトドメを刺したのだった。

◇　◇　◇

俺は、しばらくの練習の後、少し休憩を入れた。

基本ここの教室は、生徒たちに使われてないようなので、他の生徒が来ることは、ほとんどなかった。朝から晩まで練習漬けの毎日だ。

常識的に言えば、俺たちは学校側のルールに違反しているわけだが、この前ゆりが言ったように学校側のルールを受け入れてしまうと俺たちは、消えてしまう。

しかし、そうなるとこの間の天使の件も大分危なかったのでは、ないだろうか……。

「キョウスケさん！じゃんけん！」

「えっ！？」

考え事をしている俺へ関根がじゃんけんを仕掛けてきた。

「ポンッ！　キョウスケさんの負けですね！　みんなの分の飲み物買ってきてください！」

「ちょっと待て！？　まじめに考えてる最中にそれは、ないだろ！？」

「余所見してるほうが悪いんですよ！　それにこういうときは、男の人が代わりに行くのが当然です！」

そんなこと聞いた覚えがない。

人がまじめに考えてる最中に他のことしてくるなんて、反則もいいとこだぞ！

「やる前にちゃんと言ったのに聞いてないほうが悪い」

ひさ子にそう言われて俺は、まわりを見渡す。どうやら俺だけが本当に聞いてなかったらしい……。そして、弁護してくれる味方もいない。
となると俺のやるべきことは、一つ。
「……すいません、買いに行きます」
「よし。じゃ、私はお茶ね」
「私は、ｋｅｙコーヒーで！」
「わ、私も……！！」
「私は水でいいけど……さすがに数多いし、ついて行こっか？」
「あー、大丈夫。俺一人でいいよ」
岩沢の手助けを丁寧に断ると俺は、飲み物を買いに外の自販機へ向かった。

◇　◇　◇

「……なんだｋｅｙコーヒーって？」
自販機の前に付き、俺は素朴な疑問を浮かべた。そもそも、ここの自販機っていつ補充されてるんだろ？　まぁ、どうでもいいか。
俺がこの場所にいること自体あり得ないことなんだから……今更こんなこと考えても仕方がない。
全員分の飲み物を買って教室へもどろうと後ろへ振り返ると……背の低い女の子が一人突っ立っていた。

髪の毛は、ピンク色と派手で、おまけにチェーンやアクセサリーなどパンクなファッションに身を包んでいた。それに小悪魔みたいな尻尾って……どこの電波だコイツ。

「……だれ？」

「はじめまして！　ユイって言います！」

ユイという女の子は、俺の疑問に素直に答えた。

こっちとしては、だから何なんだ？　って感じだが……。いつから後ろにいたんだ？

「さっきの曲聴いてました！　私の憧れは、岩沢さんですが、キョウスケさんの曲も凄かったです！！　ファンになりました！」

「！……さっきの曲聴いてたのか。てか、なんで俺の名前を……」

「教室で他のメンバーの人がそう呼んでました！　いつも見てますから！」

この子は、さっきの演奏を外でずっと眺めてたのか……。

ファンがいるってのは、聞いていたがこのユイって子は、筋金入りの追っかけっぽいイメージが俺の中に浮かんだ。しかし、だからといって何故ここにいる？

「……俺になにか用か？」

「別に用ってわけじゃないんですが……あの曲、何ていうんですか？」

とっさに聞かれて俺は考える。
あの曲は、俺の頭の中に浮かんだイメージを勝手に演奏したというか……俺の体が勝手に演奏しただけというか……そのつまり、
「……何だろ？」
俺には、わからなかった。
「アレ…？　曲の名前わからないんですか？」
ユイに聞かれた俺は、頭の中にフッと浮かんだことを急に呟いていた……。
「……作ったのは、俺じゃない。……アイツが作曲してそれを皆で演奏して……ってアレ？　俺何言ってたんだ……？　アイツ？」
「？……アイツって岩沢さんのことですか？」
「違う……岩沢じゃ、ない」
ユイに聞かれ、俺はとっさに答えた。
「じゃ、誰なんですか？」
「……さぁな」
そう言って夜の校舎を眺めて見る。
その問いに俺は答えられなかった。
なんだか、この世界よりも俺自身の存在が一番の謎のような、そ

んな気がしたからだった。

3話　過去の記憶（後書き）

今回は、ちょっと文章量少なめです。
最後の終わり方が少しまとめきれず、申し訳ありません。
主人公の過去については、ちゃんと説明していく予定です。

では、また

これから初ライブや天使との戦いなど、いろいろと書いていくので
応援よろしくお願いします！

4話　ひさ子と恋人！？（前書き）

実験がてら書いた短い話です。

前の3話の続きですが…。これで3話の話は、終わり…という感じです。

大分、暴走した内容なので嫌いな方もいるかもしれません…。

では、どうぞ

4話　ひさ子と恋人!?

「おっ、もどってきた」
「遅いですよー」
「悪い、時間掛かった…」

ひさ子と関根の返事に苦笑しながら返答する俺。
さっき思い出したことは、言わないほうがいいだろう…そう思った。
俺は、買って来た飲み物を岩沢たちに渡していく。

「ありがとキョウスケ。…どうかした?ボーっとしてるように見えるけど」

俺は、平静を装っていつも通り接したが、どうやら岩沢には、隠せないらしい。
だが、ぞれでも俺は…。

「…別になんでもねえよ。少し疲れただけだ、バンド練習久々だったし」
「そっか…」

少し言葉に覇気がなかったが岩沢は、答えるとすぐいつもの顔にもどった。
俺も岩沢の隣に立ち、ｋｅｙコーヒーを飲んだ。
さっきの岩沢の表情…やはり変に誤解された?…そう考えていると…。

「キョウスケさん、ダメですよ〜!もっと岩沢さんとくっ付かなき

や！」

いきなり関根は、現れるなり俺と岩沢をくっ付けようとする。そのせいで、さっきまでと違い俺達の空気は、一気に明るくなった。

「なっ！？」

「あっ」

関根が両手で押して、そのせいで俺の肩と岩沢の肩が触れ合う。勢いが強いせいで岩沢の胸のふくらみが肩に少しだけ当たった。

なんか、考えただけで赤くなってきた…。

岩沢も満更でもないのか、少し顔が赤い。

「お似合いですねー！」

喜ぶ関根。しかし、その後ろから…。少し、怒り気味な顔のひさ子が近付いてきた。

「関根！キョウスケや岩沢が嫌がってるからやめろ」

蛇のように睨みながら関根に突っかかるひさ子。そして、何故かこちらのほうも睨んでいる。

…何故、そんな風に怒ってるんだ？

「嫌がってる風には、見えませんがー？……ひさ子さん、もしかしてキョウスケさんの隣りにいたいんですか？」

「なっ！？別に私は、そんなつもりじゃ」

「それなら早く言えばいいのに……入江！」

「はい！行きますよキョウスケさん！」

「何が！？」

そう言われ関根と入江の二人に両手を引っ張られた。この二人、見た目のわりに力強い…！

――――そして、そのままひさ子のほうへ思いっきり放り投げられた！

「ぬわっ！？」

「ちょっと、キョウスケ…！」

思いっきり俺は、ひさ子にぶつかった。その拍子に彼女の両手を掴んでしまう。

そして、そのまま床に倒れ俺の体は、ひさ子の体に覆い被さった。

ていうか周りから見たら男が女を押し倒してるようにしか見えないだろ！！コレ！！

「…んっ？」

なんか、唇がやわらかい何かで塞がれてる。

そして、俺の前には、ひさ子の顔が…！！――――これは、まさか！？

俺は、ひさ子とキスをしてしまった。

「んむっ！？…ぷはぁ！ちょっ、離れてよ！」

「！……すまん！」

「押し倒してキスまでするなんて、すごいですキョウスケさん」

「とっても大胆です…！」

「お前らのせいだろ！」

「でもキスまでするなんて、こっちも考えてなかったので」

真っ赤になって動けないひさ子を尻目に俺は、犯人である関根や入江を問い詰める。

その後ろで岩沢は、呆然と立っていた。何か心底ショック受けたような顔してるが…。

「まぁ、いいじゃないですか。これで幸せなカップル成立です。ひさ子さんも問題なさそうだし」

「問題あるだろ！！俺も悪いけど、あんなことになってひさ子にも迷惑だろ！」

「いーじゃないですか。これでひさ子さんといろいろやって大人の階段上がってください」

「お前は、余計なことが多い！！ひさ子、ほんとに悪かっ…た…」

俺はいろいろ言い合ってる中で、ひさ子へも謝罪しようと振り向くがそこにいたのは、ブチ切れる寸前のひさ子だった。

「私に…あんなことして…アンタは…！！」

「ちょっ、ひさ子…？」

殺気を感じたのか俺の周りから関根たちが離れていく。

ていうかひさ子さん！怖いんですけど！？

「百万回死ねぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！

まだ二回目だった。

4話　ひさ子と恋人！？（後書き）

個人的にまこすけは、ガルデモメンバーが好きです。

天使やゆりが好きな方は、申し訳ありません。そのキャラクターたちもちゃんと話に出していきます。しかし、この作品のメインは、ガルデモのメンバーで通していきます。

かなり暴走した内容ですが、こういう内容のほうが書いていて実は、楽しかったりします。オリジナルの展開ですみませんが…。

次回以降ライブやガルド降下作戦など…原作に合わせていくようにしていきます。

では、また

5話　告白と京介の過去（前書き）

なんか私の妄想大爆発的な回の話です。
展開が早いなどの突っ込みは、いれないでください。
いろいろと無茶振りが多いかもしれませんが、見てやってください。
それでは、どうぞ

5話　告白と京介の過去

――白い。白い雪が見える。
俺の目に映る背景。暗い夜空と光る町並み、町の道路を通る車、その上に白く積もる雪。そして、俺の目の前には、一人の女の子がいた。
『キョウスケ…なんで…？なんでダメなんですか！？』
目の前の女の子が俺に向かって、叫んでくる。
『別に、ダメってわけじゃない！だけど…もう少しだけ、考えさせてくれ…！！俺だって…』
必死に反論する俺。いったい何を言っているんだ…？
『……もういい！！キョウスケの馬鹿！！』
そうやって叫び、女の子が俺から遠ざかっていく…。
――その時
『……――――！？危ない！！』
――女の子が走って渡ろうとした横断歩道へ車が突っ込んできた。
『えっ？』
気づいてない彼女の元へ俺は走る。そして、おもっきり彼女を横断歩道の向こう側へ力一杯、突き飛ばした。
だが車は、代わりに俺目掛けて突っ込んでくる。
『！…キョウスケ！？』
俺の体は、吹っ飛ばされ、その拍子に右手が宙を舞った。
『イヤァァァ！！！

どうやら眠ってたらしい。
「つっ！？……ゆり？」
俺の名前を大声で呼んだのは、死んでたまるか戦線のリーダー、ゆりだった。
俺を睨む彼女は、いつも通り腕組みして、偉そうに机へ居座っている。
その顔からは、若干だが苛立ちを感じた。
「何ボーっとしてるのよ。私が『ギルド降下作戦』の説明をしてる最中に、居眠りとはいい度胸ね？」
ギルド降下作戦、そういえばそんなこと前に言われたっけ？
そんな風に思いながら俺は、とりあえずゆりに眠ってたことを謝った。
「……わるい」
「？…まぁいいわ。続けるわよ」
顔をしかめたがゆりは、話を続けたようだった。
周りを見るといつもと違うメンバーの顔が見えた。
そういえば、ゆりが言ってた大山だっけ。見た感じ普通の青年、というか決まった特徴みたいなのがあんまり無いな。
見るのは、初めてだった。
「…以上よ。それじゃ、準備を整い次第、地下を通ってギルドへ降下。総員、配置に付いて！」
俺があれこれ考えてるうちにゆりの話は、終わったようだ。……スマンゆり、ぜんぜん話し聞いてなかった。
そんなとき、後ろから声を掛けられた。
「キョウスケ、大丈夫か？疲れてるなら保健室へ行ったほうがいいよ」
岩沢だった。心配してるせいか、少し口調がやわらかい。
「大丈夫だ。ぜんぜん疲れてない…心配するな」
「…うん」
俺の返答に少し安堵したのか、岩沢は、安心したようだった。

「岩沢、とひさ子もついて来るのか？」
「…ゆりの話聞いてなかった？今回は、メンバーが多いから2班に分けて、別々のルートで地下へ行くんだよ。ゆりたちは、A班。私たちバンドメンバーは、B班で」
ひさ子の説明を聞いて俺は、目が点になった。そんなこと言ってたのか…。
しかし俺は、とりあえずその場をしのぐ為に…、
「…そういえば言ってたな」
適当な返事を返してしまった。

◇　◇　◇
しばらくして地下への入り口に集結するA班とB班。ゆりたちとは、別の入り口のため俺たちバンドメンバーは、通信機で連絡を取り合っていた。
『皆、準備できたわね！それじゃ、行くわよ！B班も別ルートでお願いね』
『了解しました。ゆりっぺさん。ご武運を』
俺の隣に通信機で連絡を取り合うゆりと……誰？
「…どちらさまで？」
「失礼しました。こちらの班にオペレーターとして入った遊佐と申します。以後お見知りおきを」
「…どうも」
見た目は、金髪で小柄な女の子だが、冷静な物言いがまったく幼さを感じさせない。しかも無表情。
「そんな幼女を観るような眼で見ないでください。捕まりますよ」
「別に幼女だなんて言ってないだろ！」
そんな無表情な顔で淡々と言わないでくれ…、不気味さを感じるぞ。
「…何か変なこと考えてませんか？」
感覚も鋭いようが。

「別になんでもないよ。早く行くぞ」
「逃げましたね」
「…いいから行くぞ！」
「うん」
「わかった」
「わかりました」
「了解！」
「……」
俺を含めたバンドメンバー＋αは、地下への通路を進んでいった。

◇　◇　◇

明かりが少ない、暗がりの道を進む。
俺たちは、地下の連絡通路を遊佐の言うとおりに歩いていた。
「この道をまっすぐだな」
「はい」
さすがというべきか。オペレーターの遊佐は、ちゃんと俺たちの道案内をしていた。
俺の隣に遊佐。その後ろに岩沢ら四人が並んでついて来る。
「なんか、探検みたいでワクワクしますね！」
「…幽霊とか出ない、よね？」
「入江は、そういうの相変わらず怖いんだねー」
「…だって、怖いんだもん…。」
「関根、あんまり入江を脅かすなよ」
「そんなこと言って、ひさ子さんも怖いんじゃないんですか？」
「そんなわけないだろ」
「でも悲鳴を上げて、キョウスケさんに抱き付く！…ってこともできますよ？」
「！！…な、何言ってるんだ！お前は！」
「ひさ子さん顔赤いですよ」
「！…お前が変なこと言うからだろ！！」

「キャハハッ！面白いー！」
「関根！」
「…緊張感のない人たちですね」
「……いつもあんな感じだから」
まるで子供が遠足に向かいときみたいな笑いが聞こえてくる。
俺や遊佐は、後ろの四人と少し離れて歩いてるため、何を言っているのか詳しくは、わからないが。多分、関根がひさ子をからかってるんだろう。最初のときと比べ、二人共仲良くなったものだ。
岩沢は、普段クールで通しているにも関わらず、最近、ひさ子だけ感情の起伏が激しい。
やはり、この前のことが関係してるのだろうか…？
「……ひさ子とキス、か」
あのときのことを考えると、少し恥ずかしくなる…。
そんな俺を見て何か感づいたのか、並んで歩いていた遊佐が話しかけてきた。
「そういうキョウスケさんは、どうなんですか？」
「…どうって？」
「岩沢さんとひさ子さん、どっちが好きなんですか？」
いきなり、何言い出すんだコイツは！？
「！…なんでそんなことを！？」
「関根さんから聞きました。変な三角関係になっていると」
「…関根のやつ！」
まさか遊佐以外にも話しているのでは！？……なんて、俺の中で最悪の事態が浮かんだ。
もしそうなったら、ゆりたちにも絶対からかわれる。
「で、結局のところ、どうなんですか？」
再び追求する遊佐に俺は、しばし考えた。
…が急に答えが浮かぶわけじゃない。そもそも……、
「俺にそんなの選べったって…」
「優柔不断なのが一番ダメだと思います」

遊佐は、俺の返答など関係なしにキッパリと物を言う。そんな無表情で言われると、かなりキツイんだが…。
「……」
「……そのうち、どちらかを失うかもしれまんよ…？」
ショックを受ける俺に遊佐は、意味深なことを告げた。
俺が岩佐とひさ子を…失う…？
「…それ、どういうい…」
遊佐に聞こうとすると後ろからものすごい怒号が鳴り響く。それと同時に…、
「キョウスケさん！走って！！」
関根が叫んだ。いったい何事かと後ろを振り返ると…、
「へっ？」
俺と遊佐の後ろ。つまりは、岩沢たちがいる方向から巨大な鉄球が転がってきていた。
――俺達の方向へソレは、まっすぐ転がってくる！
「うわぁぁぁぁぁぁぁ！！！

歩きながら、後ろのほうへ声をかける。注意してもなお、納得がいかないひさ子は、まだ少し怒っていた。まぁ、喧嘩するほど仲が良いって言うし…別にいいか。
「…もうさっきみたいな罠は、ないよな？」
俺は、再び向き直り、遊佐へ確認を取る…が、
「あっ…」
遊佐は、何かを思い出したようにハッとなる。
「今度は、何だよ…ってなぁっ！？」
———歩いていた地面の床がいきなり抜けた！
「ここも対天使用の罠が機動しているようです」
「それを早く言え！！」
俺は、下へ落下しながら遊佐へ叫ぶ。彼女は、俺を救出するためか、手をおもいっきり伸ばしてくる。俺は、それを掴むが…、
「ちょっ…重い…！！」
「なんでキョウスケが一番下に…！って入江、離すなよ！」
「関根ちゃん、足が千切れそうです～！！」
「手痛いって！キョウスケさん、上覗かないでくださいよ！」
「変態です」
「覗くか馬鹿！…って誰が変態だ！！」
上から岩沢、ひさ子、入江、関根、遊佐、俺の順で宙釣り状態となっていた。一人一人真上の人間の足やら手を持って、なんとか助かっていた。
「皆さん、大丈夫ですか？」
俺の上にいる遊佐が淡々と告げる。どうして、こんな時にも平気でいられるんだ、お前は！？
「これが大丈夫に見えるか！…ロープとかないのか！？」
「ないです」
即答かよ！？
「私が考えるに…一番下のキョウスケさんから順に、上へ登っていくのが得策かと思います」

淡々と物言う遊佐。
たしかに一番上にいる岩沢一人の力で、全員を持ち上げるのは不可能だ。
それなら下にいる人間から順に上へ登って行ったほうが…だが…。
「キョウスケ！早く登って…！」
岩沢の悲痛な叫びが地下通路に響く。
「でも…」
「いいから早く！！」
俺は、決心した。
「！…わかった。…でも、どこを持てば！？」
「どこでもいいから早く登ってください！」
関根が反射的に答える。
どこでもいいって…チクショー！！わかったよ！
俺は、岩沢たちが手で繋げたハシゴを使って、上へ登り始めた。
「あとで、ゆりっぺさんに報告しておきます」
「勘弁してくれ…」
遊佐を一瞥し、次は関根のほうへ。
「スマン関根」
「今回だけですからね！」
登る際に仕方なく、体の一部分へ手を回す。恥ずかしいがしっかり持たないと、本当に落っこちてしまう。しかし、持った瞬間、
「ん…！ちょっ、キョウスケさん…早くいって…」
「関根って脇が弱いんだな」
持ったまま、呟いてみる。
関根は、顔を赤くしたまま、少しだが体を震わす。…もしかして首も弱い？
「…もう…早くいって、ください…！」
ヤバイ…なんか俺の中で、黒い何かが生まれてきそう。
そんな風に考えていると…。
「早くしてくださいー！腕がちぎれそうですー！」

入江の叫び声で俺は、正気にもどった。
「！・・・スマン入江！…わるいな、関根」
「ハァ…ハァ…まったく、ですよ…！」
今日俺は、関根の弱点を握った。
「悪い、入江」
「いいえ…早く、登ってください」
登りながら入江に謝罪する。下であったことを言えるわけがない…。
同じように上を目指すが、
「キョウスケさん…こんなときに悪いですが……あとで話があります」
登る寸前、入江と顔を合わした瞬間にそんなことを言われる。
「へっ…話？」
「…はい、大事な話です」
真面目に答える入江。すいません、眼が本気なんですが…。
「わかった…。じゃあ、あとで」
俺は返事をし、上へ登っていった。
「…キョウスケ」
ひさ子が面と向かって俺を見てくる。
この前のこともあって、俺はひさ子と顔を合わしにくかった。
「…すまない」
そう言ってひさ子の体に掴まりながら上を目指す。このまま、素通りする勢いだったが…、
「別にいいよ…キョウスケにだったら、何されても…」
「…え？」
突然のひさ子の告白に俺は、焦って、その場から動けなくなった…。
「この前のこと…恥ずかしくて少し焦った…けど」
顔を真っ赤にし…ひさ子が何かを言おうとしている…。
普通なら、こんなとき何言い出すんだよ！って思うのに…しかも

こんな状況で…。
でも、この感覚…初めて、じゃない…。
『このまえのこと…恥ずかしく、少し焦りました。けど、私も…ホントは…』
頭の中に同じようなフレーズが思い浮かぶ。
夢の中に出てきたあの子だ。
あの子が俺に言ってた言葉だ。
「キョウスケ…」
『キョウスケさん…』
やめろ……！！
そう思った、次の瞬間―――
「！！…もう…だめ！」
耐え切れなくなった岩沢の叫びと共にみんなの体が宙を浮いた。
今までみんなを引っ張っていた岩沢の手が地面から離れたのだ。
そして…、
「えっ？」
「あっ…」
「はっ？」
「へっ？」
「…やっぱりですか」
呆気にとられるメンバーを尻目に俺たちは、そのまま下へと落ちてしまったのだった。

5話　告白と京介の過去（後書き）

読んでくださった方々、ありがとうございます！
ひさ子フラグが立ってしまいましたが、正直、書いてると誰に転ぶのか分からなくなってしまいます。私は、ひさ子も好きですが、ガルデモメンバーも好きなのですよ！
まだ、先になりますがユイも入ってくることですし…岩沢をどうしようか、とても悩んでいます。アニメとも話を繋げたいので…。
では、また

6話　入江の冒険、天使再戦！？（前書き）

遅くなって申し訳ありません！
今回は、入江メインの話で天使も登場します。

そして、いつも感想をくれる読者の方々、ありがとうございます。

それでは、どうぞ

6話　入江の冒険、天使再戦！？

「ここドコだよ……」
「…多分、地下通路の中ですね」
「…それは、言わなくてもわかるんだが…」
しばらくして眼が覚めたは、いいが…。この場所が地下通路のどこなのか、分かればいいんだが…。
天使用の罠に掛かりここへ落ちたあと、どれくらい時間が経ったのか、それすらわからなかった…。
「岩沢やひさ子も、いないか…」
ここにいるのは、俺と入江の二人だけだった…。
幸い落ちた場所が水の上でよかった。地面だったら、今頃死んでいただろうに…。
…イヤ、別に死んでも問題ないんだが…。痛い思いをしないだけ、マシだ。
「遊佐さんや関根ちゃんもいないです…」
枯れた花のように入江は、しょんぼりとした。
入江は、関根と仲が良かったからな。彼女のことを心配しているんだろう…きっと。
「ここにいても仕方ないし…先に進もう。皆、近くにいるかもしれないし」
俺は、気持ちを切り替え、今やるべきことを入江に言った。
メンバー全員が同じ場所に落ちたんだし、探せばすぐ見つかるハズ。
「…そうですね。行きましょう」
立ち上がった俺と入江は、この場所を後にした…。

そして、歩き続けること数分。

「……」
「……」
気まずい…。
静かな地下の通路を入江と歩いているのだが、これといった会話もなく、ただひたすら歩いているだけだった。
俺は、普段から入江とよく話すほうじゃない。他のメンバーとは、よく話すが…。
そもそも、入江と二人っきりになるということ自体ありえない。
関根とのツーショットは、よく見かけるが、入江と一緒に行動することなんて、あまりないことだった。
このままだとマズイなぁ、何か話さないと…。
「そういえば、入江」
「ひゃい！？」
突然、声を掛けられたことに驚いたのか、入江は変な声で反応した。
「な、なな…なんでしょうか…！？」
「俺にあとで話があるとか、言ってなかったか？大事な話って…」
「あ…そういえば、言ってましたっけ。…すいません、忘れてました」
忘れてたのかよ…。
入江は、緊張しているのか恥ずかしがっていた。
「…大事な話って何だ」
俺の質問に対して、急に入江が止まる。俺も足を止め、後ろのほうへ振り返った。
「……入江？」
入江は、立ったまま俯いていた。恥ずかしがって顔を向けたくないのか…そんな感じだ。
「……キョウスケさんに、どうしても尋ねたいことがあるんです」
「なんだ？」
急に改まって何なんだ…。

そうやって俺が考える中、入江は、バッと顔を上げ俺に叫んだ。
「私たちのバンドの名前って何なんですか！？」
「……は？」
「は？…っじゃないですよ！どうして名前がまだ決まってないんですか！？メンバーも集まって練習もするようになったのにどうしてまだ、バンド名がないんですか！？名前って大事ですよ！！たとえば、生まれたときに両親が付けてくれた私たちの名前だってそうです！名前には、とっても大事な意味があるんです！それぐらいとっても重要なんです！！なのにいつまでバンドメンバー、バンドメンバーって言うんですか！？そもそも、ライブだって控えているのに…いつまで、名無しバンドで続けていって……」

それから1時間以上、俺は入江から長い説教を受けたのだった…。

◇　◇　◇

頬に冷たい何かが当たった。それが水滴だとわかったのは、目を覚ましてすぐだった。
落ちた所が下流だったせいか、服が水浸しだった。
私は、あたりを見回す。どうやら流されたらしい。
「ひさ子、大丈夫？」
運が良かったのか隣りには、ひさ子がいた。その近くに遊佐、関根もいる。
「うん、岩沢は？」
「平気。遊佐、そっちに関根いる？」
「はい、こっちにいます」
「頭が痛いです～」
関根は、どうやら頭から落ちたらしい。痛そうに両手を当てているが見た感じ、それほど大きな怪我もないようだった。
「とりあえず、みんな無事…？」

みんなに確認を取るが…なぜだろう、誰かが抜けている。必死に頭の中を巡らすが…、
「キョウスケと入江がいない…」
「あ…」
ひさ子に言われて気がついた。この場所にキョウスケと入江がいない。
「どうやら、私たちだけ流されたようですね。」
改めて言った遊佐の言葉に、私は凍りついた。

◇　◇　◇

「すいません、熱く語っちゃって…」
「……いや、もういいから」
入江の説教が済んだところで俺たちは、出口に向かうため、再び歩いていた。
もう歩きながら会話をするのに疲れてきた。というより精神的に疲れていた。
入江の説教、もとい大事な話に期待でもしてたんだろうか…。
「…別に期待なんて…」
「？…何か言いましたか？」
「…別に」
あれだけ、状況を気にせず話すことができるのなら、根は、明るい子なんだと思う。
俺は、入江が将来どのように成長するのか、少し気になった。
…でも、ここにいるってことは、成長すること自体、もうありえないんだよな…。最近、やたら自分が死んでいることを忘れてる気がするな。
戦線に加わって、自分がここにいるからだろうか…。いや、ここで過ごす毎日がきっと楽しいからなんだ。
「キョウスケさん」

また、唐突に入江が話しかけてくる。
「…なんだ入江」
「……ひさ子さんと話してたとき、誰のことを考えていたんですか？」
「…どういう意味？」
「あのときのキョウスケさんは、ひさ子さんを見てませんでした…。どこか別の場所を見ているような…そんな感じでした」
あのときのことを思い浮かべる。
たしかに俺は、ひさ子を誰かと重ねていた。しかし、それが誰かわからない。
俺には、わからない。
「…岩沢さんを思ってたんですか？」
「自分でもわからないんだ…」
何を考えていたのか俺は、今までのことをすべて入江に話していた。
「俺、自分の記憶が思い出せないんだ…。生前、何をしていたのか。誰と一緒にいたのか、全然わからないんだ」
「そうだったんですか…」
「でも、たまに夢で変な光景を見るんだ…。俺の前に女の子がいて、その子が俺に何かを言って…俺が事故に遭う夢…」
そして、その女の子を助けようとして俺は、車にはねられた。
「えっ、それって……あっ」
入江の手は、あきらかに何かのボタンを押していた。
「へっ？」
俺達の向かいの壁から再び鉄球が現れる。
呆然とする俺と入江。
当然、鉄球から逃れるため、俺たちは全速力でこの場から離れた。
「何でまた罠に掛かるんだよ！！」
「すいません～！！」
俺は、入江の手を引き、必死に走るが…鉄球は、容赦なく転がっ

てくる。
全力で走って、なんとか逃げ切れるスピードだったが入江は、女の子だ。当然、男の俺よりも走るスピードは、遅い。
「ハァ、ハァ…」
もう息を切らしているのか入江は、フラフラだった…。さっきも全力で走ったばかりだもんな、無理もない。
「入江、がんばれ！」
「ハァ、すいません…ハァ、私を置いて…逃げて、ください…」
「！……諦めんなよ」
「…でも！ここじゃ私たち、死なないから…」
なん、だと…！
「馬鹿なこと言うんじゃねぇよ！」
「えっ…」
「俺がお前を引っ張ってでも連れて行く！！だから、絶対に一緒にここを出るんだ！二人で必ず！！」
「…キョウスケさん…！」
しかし鉄球は、次第に俺達のほうへ近付いてくる。俺達のスピードが遅れている証拠だった…。
「きゃあっ！」
「…入江！」
力尽きたのか、入江がつまずいてしまう。俺は、走るのをやめ、入江を起こそうとするが…。
その間にも―――鉄球が俺たちを潰そうとする。
「…キョウスケさん」
俺は、入江と寄り添った。
だが、諦めかけた俺達の隣りを高速の何かが通った。
「ガードスキル『ｈａｎｄｓｏｎｉｃ』…」
――瞬間、俺たちに迫っていた鉄球は、跡形もなく粉砕された。
粉々になった鉄くずの破片があたり一面を舞い、俺達のすぐ目の前に何かが降り立った。

俺は、それを見て驚愕する。
「天使……」
そこにいたのは、最初に見た白髪の女の子。
まぎれもない天使の姿だった…。

6話　入江の冒険、天使再戦！？（後書き）

入江があまり目立ってないようだったので今回は、入江中心で書きました。
正直、誰と一緒にいされるか、かなり迷いましたが…。
岩沢好きの方々、申し訳ありません！
次こそ活躍させるので…！！

天使も久しぶりに登場。このあと、いろいろと話に絡めていくつもりです。

では、また

7話　『ギルド』最終（前書き）

申し訳ありません。長らくお待たせしました。
鬱期間に入ってましたが、なんとか更新しました。

ギルド編もここらで終わりです。

では、どうぞ

7話　『ギルド』最終

「どうして、お前が…」
目の前には、武器を構えている天使がいた。
天使の目は、明らかにこちらを見据えている。とても冷静な眼だった。
「それは、こちらの台詞です。どうして、この区域にあなた方が入り込んでるんですか…」
天使は、呆れたように言葉を発した。それは、こっちが聞きたかった台詞なんだが…。
俺は、終止考えた。
「…それは」
しかし、俺の言葉を待とうともせず天使は、単刀直入に言う。
「…拘束します」
戦闘の合図だった。
「ちょっと待てっ！」
「問答無用」
静止の声も聞かず、交戦しようとする天使に俺も態勢を整える。
万が一のために持っておいた拳銃のホルスターに手を掛けた。そして、俺の後ろに突っ立っている入江に言う。
「入江下がってろ！！」
「えっ…は、はい！」
言うなり俺は、すばやく天使に拳銃を向けた。ゆりから貰ったデザートイーグルだった。だが…。
――拳銃を人に向けたことなんて――――
「遅い」
「っ…！」
天使は、動けなかった俺に向かってくる。そして、拳銃の射線から外れ、真横に移動してくる。

俺は、反射的に銃を撃ってしまうが――発せられた鉛弾は、天使とは、あさっての方向へ行ってしまう。
「くそっ！」
でたらめに銃を撃つが…。一発たりとも天使には、当たらなかった。
天使に弄ばれている。そんな、気分だ。
立て続けに撃ったせいで拳銃の弾は、あっという間にそこを尽いた。
「……ごめんなさい」
「えっ？」
意味深な言葉と共に天使は、接近して俺に拳の一撃を入れた。
「ガハッ！！」
「キョウスケさん！」
入江の悲痛な叫びが地下の広場に木霊する。
鳩尾に食らったせいか、俺は、その場へ倒れこんでしまった。胸が苦しい。
「反省室へ連れて行きます」
倒れてる俺の目の前で、冷静に告げる天使。
どうして、こんな状況で平然といられるんだ？…そんな疑問が俺の中に思い浮かぶ。
やはり、生徒会長だから？…でも、それならなぜ、あんなことを言ったんだ？
どうして、攻撃する相手に対して謝る？
「…さっきは、何故…あんなことを言ったんだ？」
倒れたままで天使に問いただした。
俺の問いに見下すような体勢でいた天使は、頭に疑問符を浮かべたようだった。だが、その眼…。
「何が？」
天使の眼は、淀んでいた。
「どうしてお前は…悲しそうな眼をするんだよ…！」

俺の言葉に天使の目が大きく開いた。
「……」
言葉を発しない。しかし、少しだか天使は、動揺していた。
何故かは、わからないが――天使を眼を見れば、すぐにそれがわかった。それは、今まで俺が思っていた冷徹なイメージとは、まったくかけ離れていた。
「…私は、ただ…」
そう天使が言いかけた途端――――。
「キョウスケ伏せてっ！！」
――――ゆりの叫び声と共に瞬間、天使がいた場所は、巨大な爆発と共に吹き飛んだ。
「な…！」
「ふぅ…危なかったわね。キョウスケ？」
俺の向かい側に武器を持ったゆりが立っていた。
「…ゆり…？」
「あんまりにも来るのが遅いから来て上げたのよ。感謝なさい」
地下通路の一部は、跡形もなく吹き飛んでいた。
俺から少ししか離れていない場所に爆発のあとがあった。
「…死ぬかと思った」
「もう、死んでるじゃない。入江さんも大丈夫？」
「はい…」
勝ち誇った顔をしながら、ゆりが入江の近くまで歩み寄ってくる。
何とも言えない気持ちだった…そして、ゆりの右手にある武器を見て俺は、驚愕した。
「助けるならもっとやり方があったんじゃないか…？それに天使相手にＲＰＧぶっ放すヤツがあるか！？」
ゆりが天使に向けて撃った武器は、ＲＰＧ－７。通称ロシア語で「携帯式対戦車擲弾発射筒」を意味する武器、言わばロケットランチャーだった。その威力は、容易に戦車をも破壊してしまう。
そんな危なっかしい武器を天使相手にゆりは、使ったのだ。

「何よその言い種！私が助けてなかったら、アンタ今頃、四肢やら八つ裂きにされて、見るも無残な姿になってたかもしれないよ！」
俺の反応に気分を害したのか、ゆりも食って掛かってきた。
「そんなことあるわけないだろ！！それにあんな大怪我負ったら、あの子だって回復するのにも…」
「なんでアンタが天使のこと心配するのよ！天使は、敵よ！岩沢さんたちのバンドが潰されかけたのも彼女のせいなのよ！！」
「！……だけど、アイツは！！」
「…来るわよっ！」
「えっ…なぁ！？」
俺の後ろから天使が再び出現する。先ほどの攻撃のせいか、体が多少傷だらけだった…それでもなお表情は、崩れない。まるで人形のようだ。
「ガードスキル『ｄｅｌａｙ』」
天使の移動が高速化した。ゆりをかく乱するためか…？
「受けて立つわよ！！」
対するゆりは、拳銃を構えた。
まず、たて続けに撃った弾は、おしくも天使の体をギリギリ掠めた。
「遅い」
「くっ！それなら！」
ゆりは、接近戦で挑む天使に対抗し、ナイフを取り出した。ゆり自身も格闘戦に切り替えたようだった。
そして俺は、その光景を目に焼き付けていた。
現実にはない光景が目の前で起きている。
俺は、ついさっきの戦闘でまったく歯が立たなかったのに…目の前の二人は、通常の戦闘の次元を遥かに超えていたのだ。
「仕方ないわね。もう一発、もらっとく？」
そう言ってゆりが構えたのは、新しい弾頭を付けたＲＰＧ－７だった。

「…そんなの当たらない」
「どーだか」
無表情の天使相手にゆりは、勝ち誇った顔をした。
そしてゆりは、引き金を引いた。
「くらえっ！」
「ゆり！俺がいること忘れてないか！？」
「あっ…」
ゆりがぶっ放したRPGの射線上、天使のすぐ後ろには、俺がいるんだよ！！
「離れてキョウスケ！！」
「ちょっと…！？」
「キョウスケさん…！！」
入江が涙目になったのが見えた。
だが、爆風が来る瞬間――
「！…ガードスキル『distortion』」
天使は、避けることなく俺の目の前に立ち、壁となった。
「なっ…」
「えっ…」
その光景に終止、呆然となる。
天使が俺を庇ってくれた…？
だが――
「くっ…！」
ダメージを負いすぎたのか、天使は、その場から電池の切れた玩具のように地面に倒れてしまった。
「なっ！おいっ、大丈夫か？」
地面に倒れた天使の元へ寄った。
まだ呼吸は、している。意識があるうちに保健室かどこかへ…。
「…ちょっと、キョウスケ！！…ソイツから離れて！」
拳銃を構えたまま、ゆりが叫ぶ。どうしてお前は、そうまでして……、

「もう、いいだろ！いい加減、この子だって怪我してるんだ！もう、これ以上戦う必要なんてない！」
「また、あなた天使を庇うつもり！？今が天使を痛めつけるチャンスなのよ！」
「いい加減にしろよ！！お前がなんと言おうと俺は、何がなんでもこの子を守るからな！」
「！……ふざけないでよっ！！なんで…アンタがコイツのことを守らなきゃいけないのよ！」
キレたゆりの台詞に返す言葉が思いつかない。
「……なんとなく…」
「！！――いい加減にしなさいよっ！！そいつのせいで…！！」
「でも、コイツは…！！」
俺は、なおも反論しようとするが…。
「――もう、いい」
「お前…！」
天使が言葉を発した。あまり、話せるような状態では、なかったが…、
「…ガードスキル『ｄｅｌａｙ』」
「なっ！？ちょっと待ちなさい！！」
「おいっ！天使…」
「…ありがとう……」
そう言って天使は、俺達の前から姿を消してしまった。
「何なんだよ、チクショウ…」
やり切れない気持ちだけが残った。

◇　◇　◇

「来たな。遅いぞ」
「悪いわね、チャー。紹介するわ、新しく戦線に入ったキョウスケ君よ」

「このギルドで武器を作っているチャーだ。よろしくな」
「あぁ…よろしく」
自分をチャーと言った見た目、３０代のおっさんは、一応、高校生らしい。
ヒゲ面のボサボサ頭、背も高いからどう見ても高校生には、見えないんだが…。
「お前…だいじょうぶか？疲れてるように見えるが…」
「え…何がです？」
チャーが心配しているのか、話しかけてきた。
顔にでも書いていたんだろうか…。
それを見て、ゆりも話しかけてくる。
「ついさっき天使と戦闘してきたばかりだから。キョウスケ、少し休んだら？まだ、地上へもどるのには、もう少し時間掛かるから」
「…悪い、じゃ席外すわ。もどるときになったら呼んでくれ」
そう言って俺は、ゆりたちのいる場所から離れた。

◇　◇　◇

俺は、人気のない場所を見つけると地面に座り込んだ。心身共に疲れていた俺にとって、少しだが心休まる…。
さっきのこともあってゆりとは、正直居づらい。また感情的になって怒ってしまうとは…俺も子供だな。
天使にも同じように怒鳴ったことがあったが、さっきの戦闘を見ていて、とてもかわいそうに見えてきてしまった。
天使にも俺たちと同じように心があるんじゃないかと――そう、思えたのだ。
それに彼女は…、
「なんだか、前から知っているような――」
「キョウスケ！」
岩沢の声がした。

気がつくと顔の目の前まで彼女は、迫ってきている。突然のことに俺は、驚いた。
「！！――い、岩沢！？なんで…」
「怪我は！？天使と戦闘になったって、ゆりから聞いて…！」
岩沢の眼は、本気だった。
今にも泣き出しそうな声を出して、俺の体に抱きついてくる。
俺や入江よりも早めに見つかった岩沢は、ずっと心配してくれていたんだろう。
サイテーだな俺…。
「…ごめん、心配かけた」
「キョウスケ…」
俺の言葉にまた、強く体を握り返す岩沢。すると、その後ろから…。
「キョウスケさん！！あの時は、よくもやってくれましたね！！」
「岩沢とそんなにくっ付いて…！キョウスケ、どうなるかわかってるんだろうな！」
「キョウスケさん！心配してたんですよ！」
関根、ひさ子、入江が出てきた。
全員が怒りのオーラを醸しながら、俺に近付いてくる。
「あの…なんで皆さん方揃って…ここへ？」
恐る恐る三人に聞いてみる。
すると、俺の問いにひさ子がまっさきに答えた。
「ゆりから聞いたんだよ！心配して来て見れば――岩沢とイチャイチャくっ付いて…！！」
「待て！これは…」
俺の制止を聞かずにひさ子は、攻撃態勢に入った！
「問答用無用！！」
「ぐばぁっ！？」
また、いつもの感じでひさ子のアッパーを食らった…。
だが、こうやって普段どおりの日常へもどれることに俺は、少し

だけ安心したのだった。

7話　『ギルド』最終（後書き）

本編に天使がよく出てるので、今回は、天使を活躍させてる感じです。

最後にやっと岩沢を出すことができました。そして、少しだけひさ子も。

伏線を絡めたつもりでしたが…回収できるのか、正直不安でいっぱいです。

原作に合わせようとしてるのに…なんか、違ってきてるようで読者の皆様には、本当に申し訳ありません。

それでも、こんな小説を読んでいただいてありがとうございます。

コメントがまこすけの最高の糧です。と同時にプレッシャーですｗｗ

次回あたり、初ライブ編にするつもりです。

では、また

8話　結成『Ｇｉｒｌｓ　Ｄｅａｄ　Ｍｏｎｓｔｅｒ』（前書き）

なんか、いろいろ展開早いですが…やっと結成です。
キョウスケは、どうやら夢で過去の記憶を思い出すようです。
てか、これも無理やり…。
こんな小説ですが…見てやってください。
読んで頂いているだけ、とてもありがたいです。

では、どうぞ

8話　結成『Girls　Dead　Monster』

「お兄ちゃん……、起きて」
俺の耳に聞き覚えのある声がする。
なんだか、とても懐かしい…女の子の声だ。
「もう少し寝かせてくれ…」
「ダメ…。早く起きないと――遅刻…するよ？」
「メンドくさ…」
「早く…！」
女の子の声に少し力が篭る。怒っているのだろうか…。
仕方なく俺は、布団から起きることにした――。
「おはよう…お兄ちゃん」
「あぁ、おはよ…「キョウスケさん！！！！」
そこで俺の記憶は、途切れた。

◇　◇　◇

「キョウスケさん――いい加減に…！」
目が覚めた俺の前に飛び込んだのは、やわらかい何かだった。
しばらくして、それが関根の胸だったことに気づくのは、少しあとだった。
「…ん？なぜ関根が俺の目の前に？」
「それは、こっちの台詞じゃあ！！」
ひさ子のアッパーが俺の顎を直撃した。
「バンドの練習中に寝てると思ったら、いきなり関根に抱きつくなんてどういうつもりだ！？」
どうやら練習中に眠ってたようだった…ん？今なんて？
「……はぁ！？なんで俺が関根に抱きつかなきゃいけないんだよ！！」

「アンタが今してたことでしょ！！」
「ヒドイです…私の心を踏みにじるなんて…」
「別にそんなつもりは…」
「じゃあ、あのときの言葉は、嘘だったんですか！？」
「あのときって、別に俺は何も言ってないからね！？」
「あの～…練習が…」
「だいたいキョウスケさんがいけないんですよー！」
「なんでだよ！」
「優柔不断すぎるからです！」
「だから何の話だよ！」
「いい加減にしてください！ライブは、明日なんですよ！！」
練習そっちのけで喧嘩をしていた俺たちに入江の怒号が響いた。
「……はい」
入江の言葉を聞いて、再び俺たちは、練習を始めようとするが…。
「…キョウスケ、ちょっと」
教室に岩沢が入ってきた。
いつもより険しい表情で俺のほうへ近付いてくる。
他のメンバーもそれを察したのか、少し不安そうにしていた。
「…お前に用があるって」
「俺に？誰が？」
「……」
岩沢は、黙ってしまった。
聞いていけなかったのだろうか？――でも、そうしないと誰が俺に用があるのか、わからないし…。
そう、考えていると――扉からもう一人入ってきた。
「私です」
それは、無機質な声を発した白髪の少女。天使だった。

◇　◇　◇

人気のない学校の屋上。その場所に岩沢と俺、天使の三人がいた。
本当なら俺と天使だけだったのだが…、岩沢が無理言って付いて来たのだった。
そのせいかこの場所は、とても重苦しい空気となっていた。
「……この前の傷、大丈夫か？」
「もう治った」
何かキッカケを作ろうと話を切り出すが…相変わらず天使は、言葉を返すのみ。
何故だろう、言葉に殺気を感じるんだが……、
「私たちに何の用？」
岩沢がキレ気味に問いただした。しかし、天使は、あくまで冷静を装っているように返す。
「明日開催のライブ…中止にしてほしい」
あぁ…やはり、そのことか。
あまり考えたくなかったけど、学内にポスター貼れば、天使にも知られるよな…。
ポスター貼ったのがどこの誰だかわからなかったが…宣伝としては、ありがたい。
……だが隣にいる岩沢は、かなり怒っていた。普段怒らない人が怒ると怖いってぐらい…怒りのオーラがにじみ出ていた。
「無理な相談だ。ライブは、必ず成功させる」
「……あなたには、言ってないんだけど」
岩沢の言葉を天使は、すぐに返す。なんだろ、嫌な予感が…。
「だいたい、アンタ何？」
「そっちこそ何…？私は、キョウスケに用があるの…」
「用ならもう済んだ。さっさと帰ってくれるかな…」
「あなたが帰って…」
「そっちが帰れ…」
「そっちが…」
「イヤ、そっちが…」

「そっち…」
「そっちが」
「……」
「……」
第一次死後の世界大戦終了？
岩沢と天使の口論は、ここでストップした。しかし次は、二人共睨み合いとなり、一歩も引かない状況となってしまった。
何故、この子たちは、争っているのでしょうか…？
「…天使」
「何…？」
「俺は、岩沢たちとライブを成功させたい…だから今回のことは、眼をつむってくれないか？」
これが俺の答えだった。それに対し天使は、悲しい顔をしていた。この前の戦いもそうだったけど、目の前の天使は、悲しいとわかる表情をしている時、なんだかひどく脆そうに見える。さっきまで、機械的で冷静だったのに何故だろうか…。
そうして考えること五分、しばらくして天使は、俺に背中を向けた。
帰るようだった。
「じゃあ、もう止めない。あなたがやりたいように、やればいい…」
天使の顔は、どうなっているのかわからなかったが…なんだか、泣いているように感じた。
「また、邪魔するのか？」
「これ以上、酷くなるようなら…」
岩沢の追い討ちにそう返すと天使は、俺たちの前から去っていった。
なんだか、こっちが加害者の気分だ。
答えを出したハズなのに俺の中では、気持ち悪いぐらい有耶無耶なものだけが残った。
「もどろっか」

岩沢は、俺の手を引いて屋上の入り口を目指した。
俺もあとに続くが…、
「……何してるんだよ。お前ら…」
入り口の扉の向かい側、その端にひさ子、入江、関根の三人が固まっていた。
「少し、その…気になって……」
半笑いになりながら、答えるひさ子。
俺は、呆れて物も言えなかったが…、
「…練習するか！」
全員に活気が湧いた。

◇　◇　◇

「ラスト！」
岩沢の掛け声と共に演奏が終わった。
メンバーも皆、楽しそうである。
「いい感じですね！」
「はい、息ピッタリです」
「明日のライブに向けた新曲完成だな」
ひさ子の言葉にも力が篭る。
明日は、とうとう初ライブの日。しかし、俺たちは、まだ肝心なことを決めてなかった。
「曲の名前は、どうする…？」
俺の疑問に岩沢が突然、呟いた。
「Ｃｒｏｗ　Ｓｏｎｇ…」
「それが…名前か？」
「うん、作曲してるときからそんな風に決めてたんだ…。『Ｃｒｏｗ　Ｓｏｎｇ』これが私たちの初曲だ」
「Ｃｒｏｗ　Ｓｏｎｇか――いいな」
「うん」

岩沢以外のメンバーも頷く。あとは、この曲と俺の曲を合わせ、ライブを盛り上げるのみ…！
そう意気込んでいると…。
「あの～このバンドの名前は？」
「そういえば、まだ決めてなかったな」
「バンド名…？放課後…ティー」
「それは、版権的にだめだろ！」
「じゃー何がいいんですか？」
関根が呆れながら呟く。
そうだなぁ…。なんか、こうやっぱり女の子がいいし…。
「Ａｎｇｅｌ　ビー…」
「Ｇｉｒｌｓ　Ｄｅａｄ　Ｍｏｎｓｔｅｒ」
ひさ子が俺の声から上乗せして言った。
ガールズ・デッド・モンスター…？
「かっこいいです！」
入江がかなり反応した。よっぽど気に入ったらしい。
「でも、それ女の子…」
「さっきの誰かさんのより、よっぽどいいです！」
関根の嫌味っぽい一言がかなり効いた。もう、一撃必殺ですよ！
「ちょっ……あの」
「このバンドやたら女子多いし…」
「男子一人ですもんね」
あ…なんか泣きたくなってきた…。
なんか俺だけスルーされてる。
「じゃあ、Ｇｉｒｌｓ　Ｄｅａｄ　Ｍｏｎｓｔｅｒで」
「略して、ガルデモですね！」
「良いですね、決定です！」
ダメだ…俺の言葉は、届いてないらしい。
「もう、俺なんて……」
後ろを向いて、そうしょげていると…誰かが俺の肩を叩いた。

「でも、ここまで来れたのも、キョウスケのおかげだ。ありがとう」
「ありがと」
「私たちもこのバンドに入ることができましたし…」
「まぁ、感謝ですね！」
そう言ってみんなが俺の手を握った。それは、とても――とても温かくて、心地が良い。
さっきまでの暗い気持ちも吹っ飛んでしまった。
「うん…ありがとな。皆のおかげだよ」
明日に向けて俺たちは、再び練習を続けた。

8話　結成『Ｇｉｒｌｓ　Ｄｅａｄ　Ｍｏｎｓｔｅｒ』（後書き）

キョウスケハーレム！
…て感じで、途中なってしまいそうになります。
これからは、岩沢、ひさ子寄りで書いていきたいです。
あっ…でもハーレムもいいかも…。
優柔不断ですいません！！

では、また

9話　妙な四角関係（前書き）

前の話しと繋げてひさ子視点で書いてみました。
何故こうなったし…という感じですが…。
やっていくしかないね！

では、どうぞ

9話　妙な四角関係

天使に呼ばれ、キョウスケと岩沢が教室を出た頃。

「少し屋上で話してくるよ」

そう言ってキョウスケは、教室を出て行った。

そのあと私は、教室の入り口をそっと開けて、廊下を覗いてみる。

キョウスケと岩沢は、天使のあとに付いて行っていた。

天使がキョウスケに何のようだろう…？まさか！？

「ひさ子さんどーするんですか？このままだと、キョウスケさん取られちゃいますよ！」

関根が私の考えを察してか…話かけてくる。ていうか…、

「なっ、何でだよ！別にアタシは、あいつのことなんか、全然興味ないし――」

今更、何言ってるんだろ。…が正直なところ、かなり気になっていた。

昨日、ギルドからもどったキョウスケに何かしらあったらしい。

それで一緒にいた入江に聞いてみたが、何も覚えてないと入江は、言った。

ゆりも怒っていて何も話してくれなかったし…。

『なんかもう、わけがわからなくて…』ｂｙ入江

「あの天使って人、怪しいですよねー」

「何が？」

「バンドのことで何かあるなら岩沢さんに言えばいいのに、キョウスケさんを呼びつけるなんて、変ですよー」

たしかに用があるなら、このバンドのリーダーである岩沢へ直接言えばいい。

今までもずっと、そうして言われてきたハズなのに…、

「屋上で変な三角関係になってたりして…」

入江が突拍子もないことを言う。
三角関係！？岩沢と天使とキョウスケが！？
「！！…早く屋上へ行くよ！！」
変な胸騒ぎを覚えた私は、入江と関根を連れて屋上へ向かう。
別にキョウスケのことが、気になるわけじゃないんだからね！！

◇　◇　◇

「だいたい、アンタ何？」
「そっちこそ何…？私は、キョウスケに用があるの…」
「用ならもう済んだ。さっさと帰ってくれるかな…」
「あなたが帰って…」
「そっちが帰れ…」
「そっちが…」
「イヤ、そっちが…」
「そっち…」
そして、着いたは、いいが…、おかしなことになっていた。
岩沢と天使が言い合っている。キョウスケは、蚊帳の外になってるし……。
「予想通り変な三角関係になってますね…」
入江が冷静に物を言う。
しかし、あんなに感情的になっている岩沢は、初めて見た。いつも冷静でクールなアイツが…。
でも岩沢が感情的になる理由は、やはりキョウスケにあるのだろう。
考えたくなかったけど…岩沢もやはりキョウスケのことが好きなのだ…。
そして、私も…改めてそれを認めた。
「私もキョウスケのこと…好き、なんだ」
「……やっぱり岩沢は、恋する乙女ですねー」

「なんか普通の女の子みたいです」
言葉を聞いてすぐに我に返った。入江と関根がいること、すっかり忘れてた！！
「……でも、そうしたら…どうなるんでしょう…」
入江が意味深なことを言った。
「何が…？」
「キョウスケさん…生前のこと、あんまり覚えてないそうなんです」
「え…？そうなのか」
初耳だった。
キョウスケが自分の記憶を覚えていなかったなんて…。
入江の隣にいる関根も驚いているようだった。
「じゃあ、キョウスケさんは、何も覚えてないの？」
「断片的にしか覚えてないみたい…。この前聞いたんだけど、女の子を助けようとして車に撥ねられたって……」
「キョウスケは…事故に遭って亡くなったってこと？」
「多分…」
「それが足枷になってこの世界に来たのか…」
しかし、その問いに入江は、首を捻っていた。
そして、向き直り、こちらをじっと見据える。
「……これは、私の勝手な考えなんですけど…キョウスケさんが助けようとした女の子も…キョウスケさんのこと、好きだったんだと思います……」
「……なぜ、そう思うの？」
「それは……！！」
急に入江の顔が引きつる。何かに驚いて声が出せないようにも感じたが…、
「入江？」
入江の向いている方角、すなわち私の後ろを振り返るとそこにいたのは…
「！——天使…」

天使だった。
しかも、なんだか怒っているように見える。
私たちに刃物を突きつけて…天使がこちらに対し、脅迫しているような状況だった。
なんでそんな物騒なモノを…。
「は、話は、もういいのか…？」
一応、尋ねるが…。
天使は、無言だった。
右手に付いている刃物を瞬時にしまうと、そのまま振り返り階段へ向かった。
「入江さん…余計なこと、話したら許さない」
「ぴぎぃっ！？」
悲鳴を上げた入江は、強張ったまま、動かなくなってしまった。
返事がない、ただの屍のようだ。
「おい！お前、何か知ってるのか！？」
しかし、天使は、何も答えずそのまま階段を下りていってしまった。
私の中には、疑問だけが残る。
「どうして、あんなことを言ったんだ…」
しばらくして、そこへキョウスケと岩沢が現れたのだった。

◇　◇　◇

「岩沢――ちょっといいか？」
「何、ひさ子？」
「明日のライブのことで、少し話したいことがあるんだ」
「だったらここでも…」
「詳しく話したいから――そこの自販機まで、付き合ってくれない？」
「わかった」

そう言って岩沢は、私のあとを付いて来る。
入江と関根にキョウスケのことをまかしてあるので心配はない。
これで岩沢と話すことができる。
それは、他の人に聞かれない場所で、どうしても二人きりじゃないと…だめだった。
キョウスケにまだ、知られてはいけない…。
「ひさ子、どこか調子悪いのか？練習のときも少し音ズレてたし、気分が悪ければ…」
自販機の場所に着くなり岩沢は、私に聞いてくる。
たしかにさっきの練習は、いろいろ考えてたせいで集中できなかったけど…今は、そのことを言いたいわけじゃない。
「――岩沢は、キョウスケのこと、どう思ってる？」
「…え、いきなり何を」
「岩沢は…キョウスケのことどう思ってるんだ？」
岩沢は、少し焦っているようだった。
私の質問にも答えずに、少し考えている。
「わ、私は…その…」
「岩沢、はっきりしなよ！」
「ひさ子…」
私は、岩沢にはっきり言う。キョウスケのことを…。
「私は、好きだ！キョ…「ほら、やっぱりです！言ったとおりですよ！」なっ…！？」
「岩沢…ひさ子…」
私と岩沢を凝視したキョウスケがそこに立っていた。
この場面を見られた！？
そして、その隣にニヤけながら、話す関根と思いっきりこちらに向かって謝っている入江。
お前ら…！！
「ひさ子…」
「キョウスケ、これにはワケが…！！」

「――ひさ子って、岩沢のことが好きだったんだな」
「…は？」
「いきなり、こんなところで何言い出すかと思ってたら、ホントに告白するなんて…いやー、驚いたよ！？」
「ですよねー！ひさ子さんが岩沢さんに告白するなんて！まさかとは、思ってましたが…」
話が違うぞ！
私は、岩沢に言ったんじゃなくて…キョウスケに…！！」
「…まぁ、その恋愛には、いろいろあると思うから――別にいいと思うけど。二人がいいなら…俺は、その…よくわからんし」
勘違いをしている。キョウスケは、勘違いをしている。
私は、ただここで、岩沢にキョウスケのことを知ってもらうために連れてきただけで…だから、岩沢とそんな百合みたいな関係になりたいわけじゃないのに！！
なんで、そんな風に考えるんだよ！！
「岩沢…」
そう言って岩沢のほうを見るが…、岩沢は、俯いたまま動かなくなっていた。
やはり、ショックだったのだろうか…。
「キョウスケ…」
岩沢が動き出した。
拳を力強く握りしめ、一歩づつキョウスケのもとへ、ゆっくり進んでいく。
まさか…これはー！？
「キョウスケのバカー！！！

策略を企てた関根には、あとでたっぷりと折檻せねば…。
そう考えていると…、岩沢がすっきりしたようにこちらへ顔を向ける。
「まぁ…こんなバカだから、私も好きになったんじゃないかな…。キョウスケのこんなところに惚れたんだよ」
そう言った岩沢の顔は、輝いて見えた。
「私もキョウスケが好きだ」
私自身もそう言い、安心するのだった。
「俺が…いったい、何を…？」
そして、一人呟くキョウスケ。

9話　妙な四角関係（後書き）

ライブの件、本当にどうしようか悩んでいます。
主人公男なのに…。
なんとかする案を考え中です。

どないしよー！？

では、また

１０話　Ｇｉｒｌｓ　Ｄｅａｄ　Ｍｏｎｓｔｅｒ始動（前書き）

ライブ編に入りました。
この話は、３部くらいに分けようと思います。なので今回は、その一部。話数は、普通に数えていきます。
いろいろ無茶苦茶になってしまいましたが、やりたいことをやった感じで、書いてるとき、とても楽しかったです。
そして、皆さんにも楽しんで頂けたら何よりです。

では、どうぞ

10話　Ｇｉｒｌｓ　Ｄｅａｄ　Ｍｏｎｓｔｅｒ始動

『さあ、出番よ！オペレーショントルネード、発令！！頼んだわよ京子ちゃん！』
「誰が京子ちゃんだ！？やっぱりこんな格好ダメだ！！」
「今更なに言ってるんですか京子さん！大丈夫、バレないですよ！」
「そうですよ。私もかわいいと思います！」
「ぜんぜん、褒め言葉に聞こえないんだよ！！」
ライブステージの裏側にて演奏を待つ五人の女の子の中心、その中に女装したキョウスケがいた…。

ライブ開始三時間前

『Ｇｉｒｌｓ　Ｄｅａｄ　Ｍｏｎｓｔｅｒ初ライブ決行！！　日付：×月×日　時間：×時　場所：食堂近くの講堂』

天気も良い絶好のライブ日和。
俺と岩沢は、ゆりたちの待つ校長室へ向かっていた。
「いよいよ今日だな」
「そうだな。派手なライブでここのみんなを迎えないと…」
岩沢も俺と同じように意気込んでいた。
こうして、ライブができること自体、夢だったからな。きっと嬉しいんだろ。
そうして歩いていると他生徒の話し声が耳に入った。
『初ライブＧｉｒｌｓ　Ｄｅａｄ　Ｍｏｎｓｔｅｒ。あっ！岩沢さんやひさ子さんのバンドなんだ』
『へぇ～、バンド名決まったんだ。私、岩沢さんの大ファンなんだ！ねぇ、見に行こうよ！』
女生徒たちは、口々に話し出す。なんか、テンションとやる気が

湧いてきた。
そういう風に思っていると…。
『他にどんな人たちがいるんだろ？名前がＧｉｒｌｓ　Ｄｅａｄ　Ｍｏｎｓｔｅｒだから、きっと全員女の人よね』
「へ？」
一人の生徒の声に戸惑った。そして、俺の中に一抹の不安が過ぎる。
『そうだよきっと！岩沢さん以外の女性メンバーも見てみたいな～！』
『楽しみね！』
急にテンションが上がり出す女生徒たち。
なんか俺の知らないところで、大変なことになってるような気がしてきた……。
「キョウスケ――これちょっと、ヤバくない？」
隣りの岩沢も不安な顔をする。
そんなこと言われても…。まぁ、ここの生徒が勝手に言ってるだけだし……。
「…でも、まぁ全校生徒が全員そんなこと思ってるわけ……」
「キョウスケさん！！大変です！！」
そんなとき、入江、関根、ひさ子の三人が俺達のところへ駆けつけてきた。しかも、三人共かなり焦っている。
俺は、後にこれが悪夢の序章になるとは、正直考えてなかった…。

◇　◇　◇

「なんでメンバーが全員女ってことになってるのよ！！」
部屋へ入るなり、いきなりゆりに怒鳴られた。
校長室は、ゆり以外にも他のメンバーがズラリと全員揃っている。しかも全員がやや不安な顔をしていた。
全員が不安な顔をする理由――その原因は、もちろん俺である。

しかし、こっちも正直困っていた。
「俺にそんなこと言われても……」
「やっぱりバンド名が悪かったのかな…」
「ひさ子さんのせいじゃないですよ！」
ひさ子が心底ショック受けたような顔をする。…なんか罪悪感が芽生えてくるんですけど。
周りのメンバーもひさ子の声に反応して、一斉に俺を見てくる。まるで俺が加害者みたいだ。
てか、こっち見んな！このままだと俺を助けてくれる人間が誰もいないだろうが！！
そうこうしているとゆりが何かを決断しように机から立ち上がった。
おぉ！ゆり！お前だけは、俺の味方をしてくれるのか！！頼むからフォローを…、
「元凶は、キョウスケにあるわ」
凛としてゆりは、言い放った。
「なんでだよ！？」
「このままだと作戦に支障が出るわ！何とかしなさい！」
無茶苦茶だ！
しかし、俺の味方をしてくれる人物は、誰一人いなかった。岩沢も若干、テンションが低い。
ライブに関係しているからだろう。このままじゃ、演奏で全生徒を引き付けることができないかもれない。そうすると作戦が失敗に終わる。
考えに困った俺は、無我夢中で言った。
「…どうしろってんだよ！俺が女にでもなれってのか！？」
言った途端、部屋が静かになった。
何かを決意したようなゆりは、腕組みした腕をほどくと、俺に向けて指を刺した。
「その通りよ！女装しなさい！それしか手がないわ」

一遍の迷いもなくゆりは、言った。
ていうか、お前それ以外考えてなかったんじゃないのか！？
「だから何でだよ！だいたい俺が女装なんて無理あるだろ！？」
「必要な道具は、すべて揃ってるから問題ないわ。安心して！すっごく可愛くしてあげるから！」
「お前が単にやりたいだけだろ！！」
このままだといろいろとヤバイ…。とりあえず俺は、この場からのエスケープを考える…が。
「もう、うるさいわね…日向君ちょっと、椎名さんも手伝って」
俺の後ろ、入り口近くの二人が立ち上がった。
入り口を塞がれた！？逃げ道が！！
「なっ…お前らどうする気だ！？てか日向！裏切るのか！？」
「悪い…ゆりっぺには、逆らえねーんだ。だから……悪く思うな！」
一斉に襲い掛かる日向と椎名。
日向は、ともかく椎名に間接を封じられた俺は、床へ這いつくばったまま動けなくなった。
「椎名さんそのままにしといてね。じゃあキョウスケ以外の男子はみんな、着替え終わるまで外に出ていって」
「りょーかい。じゃ、がんばれよキョウスケ」
そう言って出て行く日向たち。
そして、動けない俺のそばへ悪魔の笑みを浮かべたゆりが、ゆっくり近付いてくる。
「大丈夫よ、すぐ済むから……」
「嫌だぁぁぁぁぁぁぁ！！！

「…お前、ホントにキョウスケか…？」
「見違えたぞ…」
「馬子にも衣装だな」
「意味違うんじゃない？」
「Ｉｔ、ｓ　ｇｌｕｍ？」
「もう、いっそのこと殺してくれ…」
日向ら戦線メンバーが口々に言う。まったく全然、嬉しくないんだが…。
「……なんか可愛すぎて、逆に腹立ってきたわ。もう、そのままで良いんじゃない？」
「良くねーよ！！」
今の俺は、黒、赤を基調としたゴスロリパンクファッションに身を包んでいた。鏡で見て自分でも驚いるがその姿は、まさに女性そのものだった。
ゆりが指摘するのも無理ないかも……って別にそういう趣味があるわけじゃないからな！
「キョウスケ…もしかして、コレなのか？」
日向が右手を沿ったまま顔の近くに置いて、オカマもしくは、変態みたいなポーズを取る。
「違げーよ！お前、あとで覚えてろよ！」
日向には、あとで折檻&アッパーを咬ましてやる。
「浅はかな……いや、むしろ可愛い…！」
椎名さん…あなたまでいったい何を言ってるんですか……！？
「でも、これなら全然大丈夫だな。似合ってるよキョウスケ」
岩沢ー！？
「可愛いですよキョウスケさん！いや…京子ちゃんですね！」
「京子先輩、可愛いです！！」
関根に入江！！余計なことを…！！
「京子か…。それもいいかも」
ひさ子まで…。

もう、この教室に俺の味方は、誰一人いないんだ…。そうなんだ…ハハハ…。もう、俺…泣きたい…。

そして、ゆりが頃合いを見て言った。

「みんな、時間まであと少しよ！各個人の持ち場に付いて準備開始！オペレーションを開始するわ！」

「おぉっ！！」

全員のテンションが最高に達している中、俺だけがただ一人…最悪のテンションだった。

死にたい……ってもう、死んでるのか…。

――そして、ライブが始まる。

１０話　Ｇｉｒｌｓ　Ｄｅａｄ　Ｍｏｎｓｔｅｒ始動（後書き）

主人公、女装させてしまいましたが、別に変態とかそんなんじゃないですｗｗ
オリジナルの主人公だし、これぐらいやらないと…！！ということで、設定の一部にしました。
気分を害した方々がいたら申し訳ありません。

ここからもう少し、続くので楽しみにしておいてください！

では、また

１１話　天使との開戦（前書き）

しばらく投稿してなくて、申し訳ありません。
お待たせしました。

ライブの話なのに、あんまりライブシーンが少ないという…。今回、
戦闘メインで描いてます。
あんまり出なかった日向が活躍します。

では、どうぞ

11話　天使との開戦

『さあ、出番よ！オペレーショントルネード、発令！！頼んだわよ京子ちゃん！』
「誰が京子ちゃんだ！？やっぱりこんな格好ダメだ！！」
「今更なに言ってるんですか京子さん！大丈夫、バレないですよ！」
「そうですよ。私もかわいいと思います！」
「ぜんぜん、褒め言葉に聞こえないんだよ！！」
「いい加減、腹を決めてください！生徒が待ってるんですよ！」
「ぬぐぅ…」
「キョウスケ…行こ」
「……もうヤケクソだ！行くぞお前ら！！」
「うん！」
「よし！」
「はい！」
「わかりました！」
皆、口々に言葉を返す。
希望と葛藤を胸に――抱いて…。

――俺たちは、ステージへ立った――

俺達の登場と共に歓声が沸いた。室内に狂喜と叫びが響く。校内は、活気に満ち溢れた。
女装のことはともかく正直、ここまで来れたことが嬉しかった。岩沢たちと一緒に。
このステージで歌えることがみんなの願いであった。
記憶が曖昧で、どうしてギターが弾けるのかもわからない――がそんなこと、どうでもいい。
今やるべきことは、ただ一つ。みんなの願いを歌にのせて演奏す

るだけだ。
「聞いてくれ！一曲目『Ｃｒｏｗ　Ｓｏｎｇ』！１」
校内は、一気に盛り上がった。

◇　◇　◇

「……すごい人数ね。ポスターを貼った回があったわ。何があっても動けるように準備しといてね、日向君」
「了解、ゆりっぺ」
ライブが開始して、しばらくが経った。構内は、かなりの熱気に包まれている。
キョウスケや岩沢たちも一生懸命、やっている。やっぱ、すごいな。
俺は、その様子をゆりっぺと一緒に見守っていた。
この場所にいるのは、ゆりっぺが俺たち戦線メンバーを予め、決めた配置に付かせたからだった。
それにしても……、
「やっぱキョウスケ…じゃなかった――京子ちゃん、可愛いな」
「えっ……日向君、そういう趣味だったの？」
ゆりっぺが驚きながら俺のほうを見る。しかも若干引き気味。
「違うって！別にそういう趣味じゃねぇよ！ただ、見た感じ女の子と変わらないなって思っただけだ！」
女装したときは、まさかな！――なんて思ってたけど、でもかなり可愛いほうだったぞ！
そのままでも、全然大丈夫なぐらいに！
しかし、ゆりっぺは、呆れたような顔をする。
「……まぁ、いいわ。……とりあえず、このまま何事もなく終われればいいんだけど…」
呆れ顔から深刻そうな顔をしたゆりっぺは、急に物静かになった。
ヤバイ……キョウスケが可愛いって言ったのが、マズかったんだ

ろうか…。
「おい、ゆりっぺ…「ゆり…緊急事態だ」
弁解しようとした俺の声を押しのけて、椎名っちが会話に割り込んできた。しかも、なぜか少し焦っている。
いつもクールで通している椎名っちが焦った顔をするなんて……何があったんだ？
「どうしたの、椎名さん…？」
ゆりっぺも椎名っちに反応する。
「…天使がこっちに向かって来てる…」
椎名っちの言葉から最悪の事態を予想した。
天使がこの構内に？
俺は、すぐさま首に掛けてある双眼鏡を使って、校外を見る。
校外のこちら向かって真っ直ぐに伸びる道。その真ん中に動く物体があった。
暗がりでよく見えないが、白髪で身長も低い。向こうもこちらに気づいたのか、反応して目を向けてくる。
無機質な目をした機械的な少女、まちがいなく天使だった。しかも……
「ゆりっぺ！まっすぐこっちに向かって来てるぞ！」
「このままじゃ、ライブを中止にされるわ！戦える奴出てきなさい！日向君、椎名さん！」
「了解！」
「承知した…！」
ゆりっぺに従うまま、俺と椎名っちは外へ駆け出したのだった。

◇　◇　◇

構内は、ライブでヒートアップしてるってのに学校の外は、やけに静かだった。
静かな過ぎて、逆に寒気がする。

こちらに向かってくる天使の威圧だろうか？
けど、このままほっとくわけにはいかない。ライブを中止にさせるわけには、いかないのだ。
「おぉぉぉ！！！！！！！！！！」
俺は単身、迷わず突っ込んで行った。他のメンバーが援護の射撃を行うが…。
天使には、傷一つ付かない。
「ガードスキル『ｈａｎｄｓｏｎｉｃ』…」
「なんか出したぞ！」
天使の右手に刃物のようなものが出現する。
表情は、あくまで冷静だが…向こうも本気のようだった。
「任せろ！このハルバードで！……速い！？ぐぁっ！」
「野田！」
天使に向かって、振りかざした野田の持つハルバードが弾かれる。
『皆囲んで一斉掃射よ！接近戦は、椎名さんへ！』
ゆりっぺからの指令が無線を介して、皆に伝わる。
「このっ！」
なんとしてでもここで食い止める。
できるだけ時間を稼がないと……！
しかし、こちらは手加減などしていないのに天使のほうは、あくまで冷静だった。
息切れ一つしていない。
本当にたった一人で、俺たち戦線メンバーを相手に戦っているのだ。
「相変わらず機械みたいに無口だな、お前」
「……」
「だんまりかよ！」
天使の反応に俺は、キレた。しかし…
「ぐはぁ！」
『日向君！』

ゆりっぺの声がする。
俺の攻撃は、天使に歯が立たなかった。
それは、皆も同じで…俺たちは――食い止めるだけで精一杯だった。
でも、こちらにも譲れないものがある…！！
「……ここから…先へは、ゼッテー…行かせねぇぞ！！ゆりっぺ！」
『！……スイッチ入れて！』
ゆりっぺの声と共にしばらくして、食券が宙を舞った。
それは、季節はずれの雪のように……ガルデモが歌い続ける中、それが合図になったように――しばらくして戦闘は、停止したのだった…。

◇　◇　◇

――――ライブが終わったあと、俺たちは食堂にいた。
ライブも無事成功、それと同時に作戦も完了し、生徒たちから巻き上げた食券を使って食事にあり付く。なんとも罪悪感に苛まれる行為だ。
しかし、初ライブを終えたあとだからか、岩沢たちは嬉しそうだった。それを見てると俺も嬉しくなる。
少しテンションが上がってきたところで俺の隣の席に日向が座ってきた。
「ライブお疲れ。よかったぜ、京子ちゃん！」
日向の言葉で、一気に俺のテンションは急降下した。
「……そのネタは、もうやめてくれ」
「何言ってるのよ。ライブのときは、常にあの格好よ、キョウスケ」
ゆりの一言に俺は、眼を見開いた。
「！！…はっ！？毎回、女装するのか…！？」
「当たり前でしょ」

「もう一度見てみたいです！」
「可愛いから、いいと思います！」
ゆりの言葉に続いて、ひさ子らガルデモメンバーも言う。
中でも入江と関根は、満面の笑みで答えた。
「……勘弁してくれ…」
「まぁ、ライブも成功したし、結果オーライってことで」
「岩沢まで……」
唯一の味方だと思っていた岩沢にまで、裏切られる始末。
もういいや！好きにしてくれ……。
ぐったりと机にうつ伏せた俺に日向が話しかけてきた。
「まぁ必ず、次もライブ成功させるぜ！俺たちも頑張るからさ！」
そう言って体全体でガッツポーズを取る。
ゆりから聞いたが、さっきまでライブ中、天使がライブを妨害しようとしてたらしい。
それで日向たちと戦闘になったと…。
見てみれば日向の体は、少し怪我をしている。
「天使と戦ったんだろ？日向、体…大丈夫なのか？」
「心配ねーよ！体の傷は、ほっときゃ治るし。心配すんなよ！」
日向が前線で頑張っていたことも、ゆりから聞いている。
俺たちのためにがんばってくれてたんだな……。
「それに天使のほうもこっちのライブが終わったって、分かったのか……急にどっかへ行ったからな。相変わらずワケわかんねー奴だぜ」
「…そっか」
もしかして天使のやつ……ライブを見に来ただけだったりして…
「……そんなわけないか」
岩沢たちや日向としゃべりながら俺は、考えを吹っ切るように目の前の食事をかき込む。
「日向…」
「ん、なんだ？」

「……ありがとな」
「別に大したことねーよ。次のライブも楽しみにしてるぜ！」
そう言って日向は、いつもの笑顔で俺に言葉を返す。
しかし安心は、できない…。
「これから天使との戦闘は、より一層激しくなるわよ」
目の前にいるゆりが突然、発した。その言葉を俺は……ただ受け止めることしかできなかった。

１１話　天使との開戦（後書き）

初ライブも成功したので、次あたりから本編の話にしていこうかと思います。

本編、第一話の天使との交戦は、ここから始まったという形で今回書きました。
もう原作と違う話になってますね…申し訳ありません。

けど、もう少しオリジナルの過去話を書いていたいような、そんな淡い気持ちもあったりします…。

補足ですが。
コミケが近いので、これからは投稿ペースが遅くなるかと思います。
なんかホント申し訳ありません。

こんなんで、ちゃんと終わるのかな……。

では、また！

１２話　ゆりとの約束（前書き）

遅くなって申し訳ありません。

今回でやっとアニメの１話の内容という……。

まだ前半までですが。これからの話をどうするか、すごく悩む…。

ゆりがちょっとおかしいですが、この辺あとあと説明をいれていくつもりです。

では、どうぞ

ＰＳ．内容を少し変更しました。

12話　ゆりとの約束

～ゆり視点～

「戦線の新しい仲間？」

「その通りよ。まぁ、いろいろあって勧誘失敗しちゃったんだけどね。まぁ、ここに来た以上遅かれ早かれ私たちのところに来ると思うわ」

椅子にもたれたまま、私はキョウスケへ今の事態を説明した。

この世界にまた新たな迷える魂が来たからだ。

黒い学生服で茶髪の男の子だったんだけど、こっちが説明するなり天使のほうへ向かっていってそのまま刺されちゃったんだけどね……。

「また、バカが増えるのかしら……」

「？　……でソイツは今どこに？」

「保健室よ」

とりあえず、倒れたままじゃまた天使に狙われこともあるし、日向くんに頼んで彼を保健室へ運んだのだけど――――

「どんなやつなんだ？」

「ただのバカよ」

私の忠告を無視して天使のほうへ行くなんてバカ以外の何者でもないわ。

こっちの気も知らないで……。刺されたことも自業自得としか言いようがないし。

「今のところ私と日向くんしか知らないけど、一度ここへ集めてちゃんと説明するわ。あと、岩沢さんも一緒にね」

「了解。じゃあ、一旦教室にもどるな」

「ちょっと待ちなさいよ！　京介さ、その……たまには、戦線のほうに来たりしないの？一応アナタ、前線のメンバーの一員なのよ」

「って言われてもな……。バンドの練習サボるわけには、いかないだろ。俺は、前線メンバーであると同時にガルデモのメンバーなんだからさ」

京介が言うのも最もだ。そもそも、私が強引にバンドメンバーをまとめるように私が彼に頼んだんだっけ……。自分でやったことが裏目に出るとは。

ならば……、

「じゃあたまには、一緒にトレーニングでもしない？　最近、ギターの練習ばかりでアナタ、拳銃も撃ってないでしょ？　ちゃんとしておかないといざって時、ガルデモの皆を守れないわよ」

強気で言ってみたが、内心はかなり必死だった。

それでも、踏みとどまったようで。立ち止まったキョウスケは、少し考えるように腕組みしてた。

此処のところ一緒にいるときってあんまりなかったし、訓練やトレーニングって我ながらナイスなアイディアよね。それにガルデモのためならキョウスケもきっと動くハズだし。

「たしかに最近、体力とか落ちてるかもな。……じゃあ、次のオペレーションが終わったあとにやろうか。何するんだ？」

「山に登るのよ」

「……は？」

「山に言って食料を調達するのよ。もちろん、私と京介の二人でね」

「……二人は、さすがにあぶなくないか？　せめて松下か日向を……」

「二人だけって言ったでしょ？　心配ないわよ。遭難するほど深い山じゃないし、それに死ぬわけじゃないんだし。　食料を取ったらすぐに下りるわよ」

まぁ、私も行ったことないんだけどね。

松下くんが何回か行ってるぐらいだし、すぐにでも帰れるでしょ。

それにこれぐらいしないと二人っきりって状況は、中々作れないしね。

「……わかった、山篭りでも何でもしてやんよ」

「約束よ。とりあえず、このことは他のメンバーには内緒ね」

「了解、じゃまたあとでな」

そう言って京介は、部屋をあとにした。

私以外誰もいない部屋。誰もいないことをいいことに椅子から立ち上がってクルクルと部屋の中を回ってみる。

少しだけ頬や耳が熱いのは、恥ずかしさ……じゃなくて、嬉しさなのかな……。

◇　◇　◇

「ひゃっぺん、死んでろっ！！」

それは、教室へ帰る途中だった。
野田みたいな慌ただしい大声が響いたと思ったら、目の前の保健室からホントに野田が出てきた。
いつも通り巨大なハルバードを背負いながら、ヅカヅカと歩いてくる。
傍から見たらただのアホにしか見えないが。

「む……キョウスケか」

俺の思念（悪口）が聞こえたのか、野田がこちらに気づいた。
相変わらず睨むような目付きで話しかけてくる。
とりあえず、その肩に乗せたデカイ斧を下ろせよ。見てて危ない。

「どうしたもこうしたも今の声、何なんだよ……」

「生意気な新入りに折檻したまでだ」

「新入り？　もしかして、新しくメンバーに入ったってやつか？」

「俺は、あんな奴を戦線に認めたわけじゃない！！」

「でも、ゆりが決めたことだろ？」

「……ゆりっぺがどうしてもと言うなら別だ」

どっちなんだ。

端的に物を言い、そのまま野田は、俺の横を通り過ぎて行ってしまった。多分、ハルバードの素振りか練習にでも行くんだろう。

それにしても野田は、わかりやすい奴だな。気づかないゆりもゆりだが……。

そういえば新入りがどうとか言ってたな。

俺は、そのまま野田が出て行った保健室へ入っていった。

「まさか、八つ裂きにでもされたんじゃ……」

――とか言ったまま入った俺は、立ち止まった。

室内は予想通りの光景だった。

なぜなら保健室の床には、おびただしい量の血が真っ赤な絨毯のように広がっていたからだ。その真ん中に人が倒れている。

ついさっき切り刻まれたみたいに、バラバラな人だったもの。胴体の原型が留めてない……。

しかし運が良かったのか、顔だけは人の形を保っていた。

見たかんじ男の学生服（所々破れた）に茶髪。ゆりの言っていた特徴とほぼ一緒だった。……ということは、やはり彼が新しくこの世界に来た子か。

それにしても――――

「野田のヤツ、明らかにやりすぎだろ……」

よっぽど気に食わなかったのか、それともただのストレス発散か。

まぁ、どうでもいいが。

人が死んでいるのに軽く冗談で流せる自分に内心驚きつつも、俺はその場をあとにしたのだった。

しばらくしたら、元にもどってるハズだから。

◇　◇　◇

「遅いよキョウスケ。何してたの？」

「いや、バラバラの切断した……何でもない」

「？」

少し遅れたせいか、ひさ子の声は少し怒気がこもっていた。

まだ生徒たちが賑わう校舎で俺たち『Ｇｉｒｌｓ　Ｄｅａｄ　Ｍｏｎｓｔｅｒ』は、　空き教室を借りて練習をすることが毎日の日課だった。放課後なら音楽室が使えるし、他の部活が活動を開始するため外に出るからだ。

しかし、練習の時間にも限りがある。生徒を引き付けるだけの演奏をするために俺たちは、何度も練習しなくちゃいけない。

俺がなかなか帰ってこないせいで練習ができなくて、怒っていたんだろう。

「いや、なんでもない。ゆりにいろいろ言われてさ」

「……さっさと始めるよ」

「おう」

よっぽど練習がしたかったのか。待ちきれない様子のひさ子は、

ギターを弾くために構えた。
俺が配置に付くと同時に入江が伴奏を始める。呼吸を合わし、演奏を開始する。
俺たちの音楽が教室に響き渡った。

◇　◇　◇

――2時間後――

演奏が終わり俺と岩沢は、ひさ子と入江、関根の三人を教室に残してゆりのいる校長室へ向かった。
やはり、事前に召集の情報だけを皆に伝えていたようだ。
時刻は、夕方の4時。死後の世界とはいえ、こちらにも時間の感覚はある。
窓を見ると生徒たちが校庭を走っている光景。懐かしい風景は、日常の学校そのものだった。そのせいか廊下に人の影は、ほとんどなかった。
誰もいない廊下を俺と岩沢は、並んで歩いていた。
「戦線のメンバーは、集合！　……だってさ。何かあるのかな」
静かな空気が嫌いなのか、岩沢が俺へ話しかけてきた。
「岩沢は、知らないかもしれんが戦線に新しいメンバーが増えるかもしれないんだ」
「どんなやつ？」

「見てみたらわかるよ」

実際俺が見たのは、ただの惨殺死体だったが……。まぁ、見る限り悪いやつではなかったハズ。

詳しい性格まではわからないが、ゆり曰くただのバカだから大丈夫だろう。

「ゆりが仲間にしたいって言ったんだ。アイツが言うんだから悪い奴じゃないよ。きっと」

野田は、嫌っていたようだが……。まぁ、アイツは頭の中まで筋肉バカだしな。

俺だって最初は、若干敵視されてたんだ。今では、少しだけ話せるようになったが。

「そういえば最近、京介ってゆりに呼ばれること多いよね。……なんでだろ？」

なんだろう……。岩沢の言葉に少しばかり悪意を感じた。

そんな頻繁に呼ばれてないけど。まぁ、ゆりのほうから直接連絡してくることが多いかな、最近。

「あの、岩沢さん……？」

「なに？　（顔は笑ってない）」

振り向くや、天使のような輝いた笑みをする岩沢。しかし、その笑顔が逆に怖い！！

後ろになんかいませんか！？　悪魔的な何かが！？

「ゆ……ゆりは、ただ単に戦線のことで俺に相談があっただけなんだよ。ホントだって！　俺もそれ以外何も話してないし！」（……さすがに山に行くこととかは、言えない）

立ち止まって説得（言い訳）をする俺。なんか、情けないな。

岩沢は、ジト目のままこっちに近付いてくる。その距離があまりに近いせいか、そのままキスできそうな感じだった。

岩沢の口が開く。

「……ホントに？」

「ホントだ！！」

さっきまでの自分の煩悩を振り切り、岩沢へ面と向かって答える。

それからしばらくの間、無言の空気が流れた。

「……」

周りに誰もいないせいか、まるで時間が止まったように静寂が廊下を支配した。

向かい合う岩沢と俺。

「……」

俺の視界には、岩沢しか見えていなかった。

岩沢の瞳に俺の姿が反射して見えるのがわかるぐらい、お互いの距離は近かった。

そして、岩沢の吐息が自分の心臓の鼓動がドクドクと聞こえてきて、自分の思考が追いつかない。

頭の中は、真っ白だった。

早く何か言ってくれ岩沢……！！

「……わかった。キョウスケが言うなら、信じるよ」

答えると同時に表情がいつものクールな感じにもどった岩沢は、右へと向きを変えた。

それから俺の手を握ると、

「急ご。みんなが待ってる」

そう言って俺の手を引っぱっていく。俺は、岩沢に促されるまま一緒に走り出した。

岩沢の手は、なんだか熱を帯びているように熱かったが、多分気のせいだろ。

むしろ、あの至近距離は俺のほうが緊張して真っ赤になっていたぐらいなのだから。

そのまま俺たちは、戦線のみんなが待つ部屋へと急いだのだった。

※その後、ゆりとの約束がバレて岩沢にフルボッコにされたのは、また別の話。

１２話　ゆりとの約束（後書き）

えー…、更新がかなり不定期ですが、やるとこまでやっていくつもりです。
あと質問でも指摘でも、いろいろ感想待ってます。
それが活力になりますから！

１３話　記憶喪失者の再来（前書き）

長いこと投稿してなくて、すいません。
完結を目指してこれからも少しずつやっていきます。

まだ、１話の半分ですが音無と合流しました。
あと１２話の内容を大幅に変更しました。
主人公の名前もキョウスケから京介へ変更します。

では、どうぞ

13話　記憶喪失者の再来

日向「これかっこ良くね？走馬灯戦線」

ゆり「……それ、死ぬ寸前じゃない」

松下「じゃあ、これでどうだ。消したい戦線」

ゆり「死ぬのを覚悟してるじゃない！」

岩沢「絶体絶命戦線」

ゆり「絶体絶命じゃない！」

京介「特攻戦線」

ゆり「それも死ぬのを覚悟してるじゃない！！」

大山「じゃあ、無敵艦隊！」

ゆり「今度は、戦線じゃなくなってる……」

野田「玉砕戦隊！！」

ゆり「殴るわよ！！」

日向「ライト兄弟！！」

ゆり「大喜利か！」

少し前に校長室へ入った俺と岩沢だったが、ゆりはメンバーが揃うなり戦線の新しい名前を決めるための会議を行った。
正直、呆れ半分という感じであまりまじめに答えてなかったが、すばらくして近くのソファーに眠っていた男が眼を覚ました。まだ状況がよくわかっていないようだったが何故か、すごく不機嫌なオーラが漂わせていた。
まぁ、この戦線の空気にいきなり馴染むわけないよな。

「聞かせてもらえないかしら？」

「何を？」

「死んでたまるか戦線に変わる新しい部隊名よ」

唐突なゆりの質問にも相当頭にきていたのか男は、「勝手にやってろ戦線」と答えた。

「ほぉ、ゆりっぺに歯向かうとは……いい度胸してんじゃねーか」

発言が気に食わなかったのか藤巻が木刀を構える。しかし、男はそんなことに驚かず、尚も反論しようとする。
ていうか、人に木刀向けんな。あぶないぞ。

「勝手にやってろって言ってんだよ！　お前ら一体なんなんだよ！？　俺を巻き込むなよ！！」

「短気な奴だな……。まぁ、落ち着け」

「うるさい！　俺はさっさと消えるんだよ！！」

「消えてどーすんだよ、来世でミジンコにでもなるつもりか？」
「そうだよ！　……って、え？　ミジンコ！？」
さっきの勢いが嘘のように目を丸くする男。
ミジンコは、驚くよな。さすがに。
「へっ！　魂が人間だけに宿るもんだとでも思ったのかよ」
「次生まれ変わったとしても人間とは、かぎらんだろう。フジツボかもしれん。もしかしたしたらヤドカリやフナムシかもしれん」
「仏教では、必ずしも人間に生まれ変わるとは限らないとあるわ」
俺の発言に藤巻、松下、ゆりも加勢してくる。しかし、なんでさっきから海洋生物限定なんだよ。言い出したのは、俺だけどさ……。
しかし、男は会話に突っ込むどころか真面目にその話を聞いていた。
さっきまでの怒号も嘘みたいにポカンと口を開けたまま、こちらの話を受けるだけになっていた。
突っ込む気力が無いのか。それとも、ただ単に理解してないだけか。
どうでもいいが、マンボウみたいだな……。って、また海洋生物になってるし。
「浅はかなり……」
人の思考を読み取ったように、部屋隅にいる椎名が呟いた。
毎回思うけど、どうしてそんな部屋の隅にいるんだ？

そこ暗いんだからコッチに来ればいいのに。恥ずかしいのか？

「話をもどすわよ。私たちの目的は、天使を消し去ること。そして、この世界を手に入れることなの」

「天使と戦うのか……？」

「そうよ。そして、アナタには私たちと共に戦ってほしいの」

ゆりの口調に力が篭る。通常は、面白半分な発言しかしないゆりだが、そこは戦線のリーダー。

こういう強い意志があるからこそ、俺たちはゆりに付いて行ってる。

男が次の言葉を紡ごうとした瞬間―――

野田「早まるな！　ゆりっぺぇあああああああああぁぁぁぁ！？」

扉の罠に引っ掛かったらしい野田が勢いよく現れてそのまま校外へ吹っ飛ばされていった。

「俺もあんな風になってたのか……」

「ココへ入るには、合言葉がいるんだよ。まぁ野田は、アホだからな」

「阿呆の極みだな」

自分の仕掛けた罠に引っ掛かるのは、多分アイツぐらいだろうな……。うん。

「……少し、時間をくれないか？」

「ココ以外でならいいわよ」

追い討ちをかけるゆりの返答。そのまま、悩んだ末にはとうとう決断した。

「！！……ＯＫだ！　合言葉は？」

「『神も仏も天使も無し』。私は、ゆり。この戦線のリーダーよ。隣りにいるのが日向君、見た目通りちゃらんぽらんだけどやるときはやるわ」

「そうそう……って！　フォローになってないぜ！？」

そう言って言葉を返す日向をスルーして、ゆりは紹介を続ける。日向……ドンマイ。

「彼は、松下くん。柔道五段で敬意を持って皆は松下五段と呼ぶわ。その隣りが大山くん。特徴がないのが特徴よ」

「あはは……ようこそ、戦線へ」

「Ｃｏｍｅ　ｏｎ，ｌｅｔ'ｓ　ｄａｎｃｅ！！」

そして急に現れるなり踊り出すＴＫ。相変わらず面白い奴だな。

「いや、踊らねえけど……」

「彼なりの挨拶よ。皆ＴＫと呼んでるわ。その後ろの眼鏡をかけた子が高松くん。知的に見えるけど、ただのバカよ」

そうやって眼鏡を持ち上げる高松は、本当にただのバカにしか見えなかった。

「後ろの木刀を持ってる男子は、藤巻くんよ、さっき罠に掛かったのが野田くん。彼もバカだから」

「いやそこは、付け足さなくてもいいんじゃないか？」

「今しゃべったのは、京介くんでその隣りにいるのが岩沢さん。二人は、陽動部隊のリーダーなの」

「よろしく」

そうやって目の前の男を見てみる。

やっぱところどころ破れてる黒の制服って目立つな……。新しい制服とか早めに渡したほうがいいんじゃないか？　見るからに寒そうだし。

「他にもここにいないだけで戦線メンバーは、何十人も校内に潜伏してるわ。……ところで、アナタ名前は？」

「あぁ……え、えっと……おと、音無……か？　……それ以外は、思い出せない」

そう言ってぎこちなく名前をしゃべる音無は、嘘ではなく本当に名前以外覚えていないようだった。

俺と同じように記憶喪失なのか……コイツも。

「記憶が無いパターンか。京介と同じだな」

「そうなのか……？」

「まぁ、安心しろ。直に元にもどるさ」

「そうだな。仲間が増えたって感じかな、よろしくな音無。俺のことは、京介って呼んでくれ」

「あぁ、よろしく京介」

そうやって俺は、音無と握手を交わした。

こうして新メンバーを含めた戦線の集まりは、終わったのだった。

１３話　記憶喪失者の再来（後書き）

特にオリジナル要素もなく一話の前半の話です。
面白みもなくすいません。

でも主人公は、ガルデモメンバーなのでこれからオリジナルの話などまた更新していくと思います。ゆりとの登山の話など。

いろいろと大変な時期ですが、これからも更新していこうと思います。

１４話　崩壊する歯車（前書き）

久しぶりの更新。
内容が若干ブラックな感じになってしまいました。
岩沢との関係を少し考えすぎたかも……。

では、どうぞ

１４話　崩壊する歯車

「……私がここへ来た理由、京介は知りたくない？」

いったい何があったのか。

戦線の話し合いが終わり、解散したあと俺と岩沢は、休憩がてら自販機のほうへ向かった。そして、飲み物を買い二人でベンチに腰掛けていたのだった。

「……まぁ、少しだけなら」

とりあえず聞いてみることにした。

岩沢は、飲んだいたｋｅｙコーヒーを隣りに置くと呟くように話し出した。

「ウチの家、両親が毎日喧嘩しててさ。家庭崩壊ってやつかな……。それで喧嘩のときは、いつも隣の部屋で、ずっとそれを聞いてたんだ私……。毎日毎日ずっとね」

さっきまで明るかった岩沢の顔がどんどんと暗くなっていくのがわかった。

「そんな時だったんだ。しばらくして、あるＣＤショップで『ＳＡＤ　ＭＡＣＨＩＮＥ』って曲に出会った。それから私は、音楽を目指すようになった。毎日アルバイトしながらオーディションを受け」

両親の元からの脱出。そして岩沢は、自分の夢を追い続けたんだ。

俺は、心の底から岩沢が本当に凄い奴だと思った。そのときの岩沢にとって頼れるものは、きっと自分だけだったんだと思う。

「だけど……私の思いは叶わなかった」

「どうしてだ？」

「バイト中に倒れたんだ。それでそのまま入院、脳梗塞だった。原因は、親父にビール瓶で頭を殴られたせい」

両親の喧嘩のとばっちり。

それだけで岩沢は、自分の夢を叶えられなくなったのか。せっかく夢を追っていたのに、たったそれだけで人の夢は、たやすく崩れ落ちるものなのか。

俺は、心にひどく怒りがこみ上げてくるのを感じた。

「そのまま私は、病院で亡くなったんだ……。友達や両親、誰一人見舞いに来ないまま一人で死を迎えたんだ。そして、この世界に来た――」

岩沢が右手をギュッと握りしめる。

いつものクールな感じでなく、怒りをあらわにしているのが俺にもわかった。

「この世界に神がいるかどうかなんて、わからないけどさ。本当にそんな奴がいるならブン殴ってやりたいね。私は、ただ自分の夢を叶えたかっただけなのに……な」

「岩沢……」

俺には、記憶がない。

この世界には、岩沢みたいに現実で辛い日を過ごして亡くなった

奴がたくさんいる。
だから、この世界に来た奴は皆恨んでいるんだ。そんな不幸な人生を歩ませた神って奴を。
そして、死んでたまるか戦線は、神に反抗した奴らが集まった場所なんだ。
俺は、戦線にいながらそんなことにも気が付かなかった。ただバンドが楽しくて、それだけで毎日を送っていた。
最低だな俺。
こんな岩沢や皆の思いにも気づかなかった、ただの馬鹿だ。

「けど、この世界での日々も悪くなかったよ。ひさ子たちと会えて、ゆりたち戦線のメンバーのおかげで演奏できて、毎日が充実してるって感じだった。それに何より……京介と出会えたことが嬉しかった」

「岩沢……？」

急に岩沢は黙り込んだ。そして、顔を上げる。
何かを決意したような表情。
なんだか、これから何を言おうとしているのか。俺には、少しだけわかるような気がした。
しかし、岩沢は緊張しているのか、なかなか言い出そうとしない。
そして、その姿に俺は、ある記憶を思い浮かばせていた。

『京介は……私のこと、どう思ってるの……。ねぇ、答えてよ！？京介！！』

急にあの時の台詞が脳裏によみがえる。
たしか前にも、こんな状況になって、告白されたときが、あったような……。

アレ？　あのとき……、あのときって何だ？
俺の心の中に恐怖が芽生えてくる。
岩沢が今言おうとしている言葉に恐怖を感じているのか。

『「……私、京介のことを――！」』

告げる岩沢の姿が誰かにダブって見えてくる。
そのまま俺のほうへ近付いてくる。

「や、めろ……やめろ！！」

俺は、反射的に言葉を返してしまった。
岩沢が決意してやっと出た言葉を全力で拒否してしまったのだ。

「きょう、すけ……？」

ハッとなって、気づく。
今にも泣き出しそうな岩沢の顔がそこにあった。
あのクールな岩沢が母親に叱られた子供みたいに悲しい表情を思い浮かべていた。
あぁヤバイ、今の俺は、いつもの俺じゃない。そして、同時に最低な男だと自覚する。
しかし、このままこの状況を放置するのはマズイ。
俺は、平静を装い岩沢をなだめる作戦に出た。

「……ゴメン、岩沢。急に怒鳴ったりして悪かった。さっきのは、忘れてくれ。とりあえず……その、ホントごめん」

我ながら下手糞な言い訳を並べる。それでも謝る以外に方法が思い浮かばない俺って、ホント馬鹿すぎる。そして、最低。

すごく罪悪感ドップリな気持ちだったが、不安を与えないようい つもみたく接してみる。
とりあえず安心したのか岩沢は、俺の手を握り返してくれた。
なんとか、伝わった……のかな？

「……うん。大丈夫。私は、その……驚いただけだから……ホント、大丈夫」

「……あ、あのさ。さっきの言葉だけど……」

そう言って先程の続きの話を繰り出そうとしたら岩沢は、急に立ち上がった。

「……そ、そろそろ教室もどろうか。あと、さっきのは何でもないよ。忘れてくれていいから……」

「あ、あぁ……」

そうして俺と岩沢は、教室へもどった。
俺たちの帰りがあまりにも遅かったせいか、ひさ子や関根に怒鳴られたり蹴られたりと、いつも通りの日常だった。
けれど、岩沢との関係は、結局ギクシャクしたままだった。

１４話　崩壊する歯車（後書き）

これからの展開も考えて岩沢との関係を少し崩す感じで書きました。
このあとは、天使なども含めてより主人公の過去の謎を描けるよう話を展開していきたいと思います。
次は、本編一話の後半を描きます。

では、また

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1594l/

Angel beats! R

2011年5月17日03時46分発行